
Fate/Aveng

ネコ七夜

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

F a t e / A v e n g

【Nコード】

N 6 5 5 5 W

【作者名】

ネコ七夜

【あらすじ】

凜が召喚したサーヴァントはアーチャーではなくアヴェンジャー
だったら……？
キャスターがロリっ子だったら……？
魔術師もサーヴァントも破綻した物語。

F a t e / A v e n g 嘘予告(前書き)

色々後先考えずに連載に移してみた。

今更ながら一発オチの F a t e / s t a y n i g h t 嘘予告篇で
す。

(んなモノを初投降にするな!)

Fate/Avenge 噓予告

これはあり得ないFate

登場（召喚）人物も魔術師すら破綻した物語。

体は剣で出来ている。

血潮は鉄で 心は硝子

幾度の戦場を超えて不敗

ただの一度も罪はなく

ただの一度も正義は無し。

彼者は常に悪、剣の丘で処刑を待つ。

故に生涯に善など無く

この世界は

素に銀と鉄

時は満ちた。召喚は聖杯の力を借り行う。

礎に石と契約の大公

呼び出すのは歴史に名を残す英雄。

祖には我が大師シュバインオーグ

エーテルが渦巻く地下室に熱気が立ち込める。

降り立つ風には壁を

思い描くは一筋の光、どんなモノにも屈せぬ強靱な刃。

四方の門は閉じ、王冠より出で、王国に至る三叉路は循環せよ

閉じよ（みたせ）

閉じよ（みたせ）

閉じよ（みたせ）

閉じよ（みたせ）

閉じよ（みたせ）

繰り返すつどに五度

ただ、満たされる刻を破却する

さあ、始めようか。

告げる

汝の身は我が下に、我が命運は汝の剣に

聖杯の寄るべに従い、この意、この理に従うならば応えよ

誓いを此処に

我は常世総ての善と成る者、

我は常世総ての悪を敷く者

さあ姿を現せ。私につき従う最強の使い魔。

その手に掴め、最高の勝利を。

汝三大の言霊を纏う七天、抑止の輪より来たれ、天秤の守り手よ

赤い暴風ははじけ飛び、視界が晴れていくが

「……………え？」

目の前はさつきと変らぬ地下室の風景。

何も変わらぬ地下室の質量。

「ちょ、ちょっと…冗談でしょ!？」

せつかく秘蔵の宝石まで使って執り行った召喚の儀式でまさかの失敗か。

やはり綺礼の言つとおり触媒もなしに英霊を召喚するのは無理があったか。

未だ青ざめたままその場に膝をついた瞬間

ベキバキベギギー……………ドゴン!!!!!!!!!!

上の方から明らかに我が家が損壊する音を聞いた。

大急ぎで立ち上がり階段を駆け下る。

何がどうなったと言うのか？

解らない、判らない、分らない。

歪んだ部屋のドアを蹴破り見た先には

「ゲェアアアアアアアアアアアアアアハハハハハハハハ
！！！！！」

馬鹿みたいなお笑い声？を上げる男がひとり。

「ヒャハハ！大ハズレえ、んんん？うんにゃ当たりなのか？1等
当選籤で宝くじを買うもんか？中々ぶつ飛んだ発想じゃないかよオ
ネーサン！！！」

赤い布を額や腰、手足に巻きつけた全身奇妙な刺青を施した黒髪の
少年 サーヴァントは一人ハイテンションだ。

なんて無様。

見た限り、目の前のサーヴァントは剣の英霊とは思えない。

となるとまだ召喚されていないのはアサシンかアーチャーというこ
とになるが……

「ヒューー！いきなり上空に召喚された時はどこの馬鹿だよぶつ殺し
てえと思ったけど、見てみりゃなかなかイカス小便クセえねーちゃ

んじゃん。萎えてきちまったよ。ヒヤハハ!!」

どちらにしてもマトモな思考回路の持ち主ではなさそうだ。反英霊に違いない。

「確認するわよ。あんたが……私が呼び出したサーヴァントで間違いないわ……よね？」

「ヒヒヒ、素敵な疑問形ありがとよ。ああ、間違いなく俺はオネーサンに呼び出されたサーヴァントだ。」

ニヤニヤと邪悪な笑顔で、まるでチンピラのような態度を取る全身刺青の英霊。

「なら次の質問よ。クラスと真名を教えなさい、今すぐ。」

「うわ、いきなりお堅い態度。円滑な人間関係無視かよ。」

何と云うか目の前の男が英霊であろうとムカつく態度だ。

「ま、いいか。別に隠すつもりもないしな。」

面白い顔は至極、面倒くさそうに頭の後ろで手を組み

一瞬。その顔は何処かで見た覚えが……

彼は一層口元を釣り上げ人をバカにするかのような態度で言い放った。

「アヴェンジャー（復讐者）のサーヴァント、アンリ・マユだ。」

この世全ての悪って言った方が解りやすいか？

「誰か

タスケテ……」

いやだ、イヤだ。

カリヤおじさんを思い出す。姉さんを思い出す。おじい様を思い出す。 センパイを忘れる。

体が疼く、魔術回路は黒く私を汚して行く、間桐が私を犯して往く。

誰でもいい、先輩にこんな私を見て欲しくない。

先輩の隣に居たい。

「助けて………先輩。」

地下室に充満する風に鉄の匂いを覚えた瞬間、何かが私の頬の涙を
斬り払うように通り過ぎ

「

ッ！！！！！

「————！！！！！！」

剣に貫かれたおじい様の体が燃え上がり悲鳴を上げている。

「トレスオン
投影開始」

地下に響く鋼の声は次の瞬間、辺り一面に剣の雨を降らせる。

突き刺さる剣に床は砕け、砕けた場所にまた剣が突き刺さる。

埋め尽くさせる剣はそのどれもが名剣、魔剣、聖剣の類だと一目で
知れた。

「確認する。君が私のマスターに相違ないな？」

「え、は、はい！」

呆然としていた私に赤い外套を着た長身の男性、サーヴァントが近
づいてくる。

ああ、このまま私も

「安心したまえ、……必ず君を救ってみせよう。私用は一時休止だ。」

後ろに流した白髪に褐色の肌、何一つ類似点など無いのに

「まずはここを離れようか。醜悪な匂いはそれだけで君のような女性には不釣り合いだ。」

そう言ってサーヴァントは私を抱きかかえるとゆっくりとした足取りで階段を上り、地下室を出ると。

下から大きな爆発音が連鎖しながら響いた。

「サーヴァント、アーチャーだ。よろしく頼む、マスター。」

そのサーヴァントと愛しい誰かの頬笑みが重なって見えた。

さあ、集うがいい。聖杯と運命に選ばれし英霊よ。

今度こそ君の願いは
。

嘘予告 完

Fate/Avening 嘘予告(後書き)

設定としてはFate/hollow ataraxiaのアンリマユとは違う存在、この世全ての悪の罪を押しつけられた衛宮士郎のなれの果て。

アーチャーとは相似の関係にして衛宮士郎とは対極の存在。
続かない予定。

嘘設定

設定（嘘）紹介

とりあえず今現在で考えがっている復讐者エミヤの設定です。

アヴェンジャー

マスター：遠坂凜

真名：衛宮士郎、アンリ・マユ

正義の味方を貫く中で戦争や災害を収束させ、多くの人々を救ってきたが、一切の報酬を要求しないその姿勢に周りの人間は恐怖心を抱き、やがては争いや災害を起こした張本人として仕立て上げられ、ついにはこの世全ての罪を着せられてしまった存在。

その為、後の世で拝火教（ゾロアスター教）の悪神と同一視されるまてになる。

英霊エミヤは死にゆく運命にあつた1000人を救う為に死後の世界と契約し売り渡したが、こちらは死にゆく運命にあつた1000人が命惜しさに衛宮士郎の死後を無理矢理世界に売り渡した、望まぬ守護者。

第3次聖杯戦争のアンリ・マユは拝火教を信仰していたとある村における少年の亡霊であつたため、なんの力も持たない最弱の英霊で

あつたが、今回呼び出されたのは未熟な衛宮士郎のの能力を完成させた英霊エミヤと同じ存在なので魔術や宝具も存在する。

宝具：1・無限の剣製
アンリミテッド・ブレードワークス

言わずと知れた英霊エミヤの固有結界。

但し、心像風景は巨大な歯車が回る剣の赤い荒野ではなく、黒い太陽から”泥”が滴り落ち燃え盛る地獄の錬鉄場。

宝具：2・偽り騙し欺く万象
ヴェルゲ・アヴェエスター

対人法具、

受けた傷を相手に返す呪い。傷を共有する原呪術。

hollowの偽り写し示す万象との相違点として、傷を写すところまでは同じであり、アヴェンジャー本人が即死状態では発動出来ない任意型。

また、今回は相手に対して、新たな負傷個所ができる度に何度でも効果を発動でき、なおかつ呪いや魔術などの効果もそのまま移すことができるのがオリジナル要素。

但し、発動させるためには1度につき1回対象に素手で触れ”ある魔術”を使わなければ発動できない制限がある。

本人曰く「心中勝負じゃ教典の次を張れる」らしい。

嘘1話(前書き)

続けてみました。許して下さい。
後先を考えない。そうしよう。

嘘1話

「遠坂凜よ」

とりあえず平静を装って自己紹介を済ませる。

いい加減シヨンベンガキやらオネーサンではプライドに銃弾がめり込む気分だ。

「トオサカ?...あートオサカねえ.....んじゃあ凜たん？」

「たんは止めい！」

畜生め、何で私がこんな頭の悪い会話をしなけりゃならないのか。

「じゃー凜で。うん、いい名前じゃねーか。実にあんたらしい名前だ。」

あれだけ馬鹿にしたセリフを吐いておきながら、コロコロと言葉を換えてくるあたりが素直に受け取れず逆にムカつく。

「…それじゃ質問を続けるわよ。私が知ってる限りじゃアヴェンジャーなんてクラスは聞いたこと無いわ。おまけに聖杯戦争に神様が参加するなんてこともあり得ないと思ってるんだけど?」

「ベッツにどーでもいいじゃん。ほい、Q・E・D・証明回答終了」

「ぎっけんじゃないわよ!!!いい?私はあなたのマスターであんたは使い魔。おまけに人の家の屋根を盛大にぶっ壊しておきながらそのふざけた態度!!!いい加減真面目にしないと令呪を使うわよ。」

この手の輩との会話は頭に血が上る。間違いなく遠坂凩と子のサーヴァントの愛称は最悪だ。

「えー。俺だって別に壊したくて屋根壊したわけじゃないんだけどよ?凩たんがすっかりにもこの家の上空に召喚しちまうもんだからぬートンの法則に従ってドライブした訳よ。アングスタン?」

「な〜にがアングスタン?よ!!!ちょっとうまく着地してくれるだけでどれ程修繕費が浮いたことか!!!今月やばいのよ?宝石が下手したらダースで飛んでいくかもしれないのに!魔術師が自己破産で工房差し押さえなんて洒落になんないのよ!!!」

「ま、ま、ま。落ちつけよ、凩たん。判ったって。とりあえずは暫く屋根にブルーシート張っておいて地道に貯金しようぜ?」

「ムッキー!!!いちいち頭にくるやつね!?!いい?あんたが屋根を

修理してついでにこの散らかった部屋を片付けておきなさい！」

「はあっ……なんでさ……？」

どうやら諦めが吐いたのか、ぼりぼりと頭を掻きながら愚痴をこぼすサーヴァント。

「それと、あなたはクラス外のサーヴァントなんでしょう？復讐者っていうのはどんなスキルを持っているのよ？」

「ううん。実は俺も良くしらねえ。何つつか聖杯からの知識供給やら何やらは現代の文化とこの戦争の常識的ルール説明だけだったんでな。アヴェンジャーのクラスなんてスズメの涙程度の情報しかなかったぜ？まあ自分がどういう奴かは自覚出来るから、不便はないと思うけどよ。簡単に言っちゃえば三騎士見たいな華々しさはネーな。」

なんだ、真面目になってくれればしつかりと会話も説明もできる奴じゃない。

一応こいつも聖杯戦争に参加するからにはやる気はあるのだろう。

「ってことはアサシンみたいなトリッキーな戦法が得意ってわけ？」

「アサシンなんかと一緒にすんなよ。確かに俺は格下の戦闘力しかないけど、俺の宝具は心中に関しちゃ教典の次を張れるんだぜ？」

「？教典で、なに訳の分からないことを
まっただ。今あなた
なんていった？」

「あ？格下ってことか？安心しろよ。それでも三騎にだってそう簡単に殺られるつもりはねーよ。まして人間相手なら確実に殺せるぜ？ヒューー！俺ってマジクール？」

「違っわよ！……心中とか言っただけ無かった？」

恐る恐る自分の短期記憶を否定したいと願いつつ質問してみるが。

「ああ、心中だな。本来は相思相愛の仲にある男女が双方の一致した意思により一緒に自殺、または囑託殺人すること。情死ともいう。転じて、二人ないし数人の親しい関係にある者たちが合意の上で一緒に自殺すること。さらに合意のない殺人でも状況により無理心中

と呼ばれることがある。以上wikiつた。ん？じゃあ無理心中つて言った方が良かったのか？」

「なによそれえ！？？まさか何回死んでも大丈夫、なんてスキルでもあるわけ？」

「おいおい、凜たん。そんな非科学的なことがあるわけないだろ？命はいつだって一つなんだ。」

少年名探偵風に真実と置き換えても全然カッコいいとは思えない。と言うか本当にこいつは馬鹿なんじゃないだろうか？

「それじゃあその宝具を使ったら、あんたはどうなるのかしら？」

こめかみの血管から筋肉まで余すことなく顔面が痙攣を起こしそうだ。

「……？あー、言い方が悪かったか。要は死に切らなきゃいいってことだ。」

「ヴェルグ・アヴェスターって言ってな。オレが傷を負ったときに相手に触れると、それを相手にも写すって効果だ。だから致命傷スレスレのダメージを受けりゃいくら三騎士のサーヴァントでも俺と五分の戦闘をせざるをえなくなるってわけだ。」

成程、そう言うことか。確かにこの方法なら、最優のサーヴァント、

セイバーすら追い詰めることができるかもしれない。

それに、ここぞという場面で令呪をうまく組み合わせれば使えばなかなかの手札だ。

「なによ？それなりにうまく立ち回れば心配するのはキャスターくらいじゃない。」

「まあ、傷を受ければそのたびに相手にダメージを返すことができるしな。それに、受けた傷は同一人物じゃなくてもいいし…但し、アーチャーとは相性が最悪なのが難点だな。」

「そうだ、アーチャーの本領は遠距離狙撃。今のこいつの説明で考えれば、対象者との接近戦闘でなければ意味がなく、相手に触れることで発動するのはこの宝具の使用は不可能だ。」

「接近戦闘の得意な弓兵なんて、そう都合のいい奴がいるとも限らないしね。やるとしたら、それこそこつちからうまく奇襲をかけるしかないってことね。」

「ケケケ。そう落ち込むなよ。宝具以外だつてちゃんと戦えるつて。意外と器用なんだぜ俺？」

「あんたの見た目からまっとうな戦いを想像する方が難しいわよ。」

なんか今の時間だけでどつと疲れた。

サーヴァントを召喚した時点で並の術者なら意識を保つのも難しい
と言うから、案外持った方かと思う。

「それじゃあ、今日はこのくらいにして私は寝るわ。 いい
?ちゃんと掃除しておくのよ?」

そうにらみを利かせて部屋を離れる。

「ヒヒヒ。」 チツ。……わかったよ。やっておくから。あ
と、んな自室覗くなよ的な目で睨むなよ。姦淫すんならもつとソ
ル女探すからさ。」

「お休み凜たん。」馬鹿にした声がそう最後に聞こえた。

やっぱムカつく……!このド腐れサーヴァントめ……!

嘘2話

「ひっ　　く、来るなあ！！わかった、分かったから。ぼ、僕が謝るっ、それでいいだろ桜！だから許してくれ！！」

赤い外套を着たアーチャーさんが尻もちをついて懇願する兄さんに一振りの剣を喉元に突きつける。

その瞳は侮蔑、軽蔑をうとしだしている。

「目障りだ、マスターの兄よ。早々に立ち去るがいい。もし次に我がマスターに不埒を企みでもしてみろ。拷問すら生温く思える末路を味あわせてやろう。」

「約束する！するから！！もうたくさんだ畜生っ！！　クソツ、くそっ！！やっと僕が間桐の当主になれるって、僕が魔術師になれる機会が巡ってきたのにつ！あの妖怪爺の奴あっさり死んじまいやがってえ！！！！」

うな垂れながら兄さんは床に拳を叩きつけ罵声を発する。

「いつもいつも……そうだよ、お前のせいだよ桜……！！お前さえい

なけりやこのぼくが間桐の、マキリの当主で魔術師だったんだ！それをあの爺の！親父のせいでその座を奪われたんだぞ！？」

それは何度も何年も聞いた言葉。

私が間桐になってから、兄さんの夢を壊してしまった日から毎日聞いて、傷を受けたときに聴いた言葉。

プライドの高い兄が自身を保つために吐いた怨言。

「それなのに桜あ…お前までこの僕を見下しつ、嘲笑いつ、馬鹿にするのかよ！？そのサーヴァントを僕に寄越せよ！！僕ならうまくやる！！聖杯だってこの僕なら絶対に手に入れて見せる！！お前みたいなの腰ぬけに、ドン臭い奴が勝ち残れるわけがないだろう？

……頼むよ、……僕は、ぼくは……」

こころが罪悪感に押しつぶされそうになる。

兄さんも間桐のせいで歪に曲がってしまった存在なのに

「ふん、同情芝居ならもつとうまくやるんだな、小僧。ならばこの家に在る魔道の英知を調べつくし自らの手によってサーヴァントを召喚すればいいだけの話だろう。」

「な、あ！？」

アーチャーさんの鉄のように冷たい声が兄さんの顔を硬直させる。

「そも、貴様が魔道に生きるにおいて知識のみを有すのであれば体を弄ればいいではないか。マキリだかの家柄は古きにわたる歴史があるのだろうか？そんな覚悟もない枯れた臆病ものにつき従う道理はない。その点、我がマスターはその全てを耐えきる強さがある。望まず受けた仕打ちでもそれを経験しているのとしていないのでは天と地ほどの差があるのは明白だ。貴様にその気があるなら、何故その妖怪爺に名乗り出なかった？」

「くう　　　　煩い！！煩い！！サーヴァントが僕に説教かよ！そんなのは衛宮だけで十分なんだよ！……………出で行けよ」

アーチャーさんがその言葉を待っていたという表情で口元を釣り上げる。

「聞こえなかったのかよ桜！！こっから出ていけっ！！この家に　　僕のっ！！間桐から出ていけえ！！！！お前なんてもう間桐じゃない！！二度とその名を使うな！！！！間桐の当主はこの僕だ！！臆権が死んだ今、当主はお前じゃないこん僕だっ！！！！サーヴァントでもなんでも連れて、落ち死んじまえ！！　　は、ハハハッ。そうだ、遠坂やアインツベルンだって当然今回の儀式に参加するだろうさっ！死ぬ！お前みたいな腰ぬけ、真っ先に殺されて終わりだろうさ？ククツ、ハハハ　　後悔しろよ桜？僕を見下した報いをこれから受けることになるだろうさ。」

ビクリと最後の怒鳴り声にすくみそうになったけど、自然と恐怖は水のように流れ落ちるばかりで
憑きモノが落ちる。そんな気分だった。

「と言う訳だがマスター？もうこの家に居る用は…どうやら無くなつてしまつたみたいだな。」

その人は私の方へ振り返ると、してやったりと言わんばかりの笑みで私に問いかける。

ああ、確かに形だけ見れば私は勘当も同然、間桐から縁を切られ、家も追い出される羽目になったのだからけど……今はこの行き場のない自由がとても温かい。

選択肢は無限にあり、万人が抱える苦悩すら愛おしい。

この赤い弓兵が、きっと先輩が目指すような

正義の味方なんだろう。

*

*

「 問う、貴方が私のマ

…ス、…！！？」

渦巻くエーテルの奔流からマスターの姿をとらえたとき
時間が止まる思いをした。

大聖堂

ステンドグラス

見覚えのある光景

そのどれもが前回はじまりの地、私の記憶そのまま

『クスクスッ』

そんな小さな笑い声を漏らしながら笑顔を向ける人物が……

「ご機嫌よう、セイバー、久しぶりね。あ、…それともあなたにとつては初めましてになるのかしら？」

白い髪の少女、約束を果たせず別れた前マスターの娘

「イリヤ…ス、フィール……？」

「フフツ、よかったあー。ちゃんと覚えていてくれたんだ。」

忘れる筈がない。この城で僅かな期間、共に過ごしたことも彼女の母を守り通すことが出来なかったことも

「さあ、セイバー。…ううん、アーサー王。聖杯戦争を始めましょう。」

白い雪の少女はそう誘い私の手を取る。

確認したいことはたくさんあるが今は誓いの言葉を紡ごう。

ああ、あの時の戦いが…結末は悲劇であったがライダーやランサーの武功はいまでもはつきりと思い出せる。

今度こそ、誓いを護り抜こう

騎士の剣にかけて。

今度こそ貴公の願いは

嘘2話(後書き)

破綻した組み合わせを考えるときに、丁度ZeroのCMを目撃。

これしかねえ。

そう思つて、イリヤのサーヴァントをバーサーカーではなくセイバーにしてみました。

士郎が誰を呼ぶって?.....どうしよ.....

嘘話（前書き）

私的な衛宮士郎像です。違う点があれば許して。

嘘話

衛宮士郎は魔術師なのだろうか

彼を見たことのある魔術師がいたら、殆どが否定するだろう。

彼は魔術師であることが生き様なのではない。

正義の味方になることが目的なのだ。

歩道橋を上る老人がいれば手を貸しおぶり。

道に迷っている人がいれば進んで話しかけ、道を教え。

学校で困っている学生、生徒など最早我先へと彼を頼ってやってくる。

放課後はアルバイトに精を出し、他の従業員の何倍も仕事を引き受け。

休日になればボランティアに出向く始末。

こんな人物が魔術師なわけない。

魔術師と言うものを知っていようとまいと、万人が同じ答えを口にするだろう。

詳しいものが近くを通っても、そこには魔力の残滓など欠片もない。

強引に拉致でもして体を知ればそれこそ魔術回路の一本でもあるかもしれないが、そんなモノ街中の2・300人を調べれば稀にあることだ

衛宮士郎は魔術師なのだろうか？

「同調、トレス・オン開始」

解は肯定。

声の場所は彼の暮らす家の庭にある土蔵から。

誰もいない真夜中に響く、一工程のトリガーワードはその存在が魔道に生きる者の証明である。

脊髄に流れる液体が急速に冷却されていくような背骨が発火炉のように身を焦がしていくような、今日も始まる衛宮士郎の命がけの魔術訓練が始まる。

彼は知らない。

こんな行為、魔術師のすることではない。

彼は知らない。

魔術の何たるかを。

彼は知らない。

養父が魔道を正しく教えなかったことを。

知らずに10年近くも間違った訓練を続けている。

止める者はいないのだろうか？

そんな者は一人としていない。

彼はこの世の魔術師を、魔術を知るものを一人しか知らない。

彼の養父にして故人、衛宮切嗣しか知らない。

故に彼は魔術のほとんどを知らない。

否、使えない。

覚えていないモノも僅かにあれば、扱えなかったモノは大半を占める。

強化

ただそれのみが衛宮士郎の扱える魔術である。

但し、成功率は1%を切る。

繰り返そう。

衛宮士郎は魔術師なのだろうか。

そもそも、彼は何故魔術師なのだろうか？

「正義の味方になりたい。」

この一点の目標の為の道具として、魔術の訓練をするにしてもえらく矛盾している。

紙切れ一つ存在強度を強化するにしても、彼がそれを成功させるに

は小1時間かかる。

効率云々の問題ではない

無駄の極みである。

借りに成功しても失敗しても、それが何になると言っただろうか？

彼が目指す正義が視えて来ない。

「誰かを救える、誰もを救える存在になりたい。」

目標が、目的が定まらない。

彼の学校が学年に配布した進路希望調査表
いないのは彼を含めた数名のみであった。

未だ提出して

提出期限はとうに過ぎている。

しかし、それについて彼に指摘するものはいても、
気遣う者はいない。

皆、わが身の将来を考え体のいい便利屋として利用できればそれで満足だ。

通行人も、アルバイト先の同僚も。

そう、彼の周りこそ魔術師のごとき立ち振る舞いなのに衛宮士郎はまるで一般人のようだ。

利用されこき使われるなどそれこそ魔術師ではない。

ならばそれこそ彼が望む正義の味方なのだろうか？

報酬も褒賞もなく、只々まるで機械のようにその身を削りすれ減らし廃棄物になり果てるまで止まらない存在こそ彼の目指す正義なら、それは最早人の所業ではない。

人が歩む道を逸脱しているところの話ではない。

道すら歩まず、虚空をもがく人でなしだ。

これほどの凶行、まるで魔術師のごとき茨の道だ。

つまり
う。
どうやら衛宮士郎は魔術師の様な奴なのだろ

そんな魔術師とも呼べない衛宮士郎はとあるアルバイト上がりの夜、
何気なくいつもとは違う空気を感じた帰り道の路地裏で

「
い、
じょうぶ
?!?!?」

また、何時ものように、御節介よろしくと曲がり角の傍らで倒れる
人物を助けようと声をかけていた。

これが衛宮士郎の日常。

どこの誰とも知れない見知らぬ他人を放ってはおけない、破綻者の
凶行。

そんな行為も、今回ばかりは状況が違った。

倒れていた人物はまるで人間なのに、その体は今にも消えてなくなるのではないかと言うほど

否、これは比喩ではなく

本当に体が透け始めている人間らしきモノに衛宮士郎は声をかけていた。

しかも、こんなことが日常で起こりえることなどまずあり得ないのにもかわらず、衛宮士郎は若干の驚きと戸惑いを見せるだけで、行為自体がえらく日常的であるかの如き態度であった。

衛宮士郎は奇跡を起こせぬ魔術師だ。

ならば、これはきつと分かれ道なのだろう。

その身が正義であるのか悪なのかを決める、運命の歯車が狂いだした瞬間だった。

「俺は助けるよ、正義の味方になる為に

」

たとえば、この世全ての罪を背負うことになるつもり。

嘘3話(後書き)

アンケートつぽい何か

? キャスターはお姉さんだ!!

? キャスターと言ったらJKだろ。

? キャスター!! 口りいた(悟り)

嘘4話（前書き）

同志の説得とはここまで心を揺さぶられるものなのか。

一番多かった？の悟りキヤスターで行きます。

ご協力ありがとうございました。

嘘4話

「おい！大丈夫なのか！？？しつかりしろ！！」

どうしたらいい？

どうしたら助けられる？

喧嘩でボロボロにされた学生や酔っ払いのおっさんを介抱した時と似たようなシチュエーションだけど、こんなパターンは初めてだ。

そこに居たのはボロボロの黒いローブを身に纏った、見た目の幼さが際立つ美少女。

目の前の少女は外国人なのか、淡い紫白の髪に今まで見たこともない様な変わった形の尖った耳、そして外見はどこからどう見ても俺と同じ世界、魔術師をイメージさせる黒いローブに身を包み、背中をビルから伸び張り付く配管にもたれかかり荒い息を上げている。

いいや、そんなことはどうでもいい。

それよりも一番問題なのが　少女の体が透けて……まるで消えかけているみたいだ。

人が消える……死ぬって言うのか？

冗談じゃない、衛宮士郎は魔術師であり正義の味方だ。

助けないなんて選択肢はあり得ない。

まして、こんなに苦しんでいる少女を見捨てれば、衛宮士郎はその存在意義を見失ってしまう。

バイトの賄いでもらった、弁当の入ったビニール袋を脇に投げ捨て少女のか細い肢体を抱え起こす。

それは正に質量を失っているかのように、その存在が無くなっているかのように重さを感じない体だ。

だけど掌から伝わる少女の柔らかさ、体温、幼さから来る香りが確かに現実だと主張する。

何が何なのか解らないけど

落ちつけ。

幸い時間は夜でここは人通りもない路地だ。

魔術を使っても目撃者はいない。いや、例え誰がいようともそんな事を気にしていたらこの人は本当に助からなくなってしまうかもしれない。

こんな不可思議、救急車に乗せて病院へ連れて行っても処置なんて出来るわけがない。

ならば自らの手ですくうしかないだろう、衛宮士郎。

目の前の少女を救えるかどうか、ここから先は己との勝負だ。

「
トレス・オン
同調・開始」

衛宮士郎を現す言葉を紡ぎ、意識を己の中へと埋没させる。

いつもならたつぷり30分はかけて作り上げる、魔術回路を起動させるためのスイッチを
工程をすっ飛ばして一気に組み上げる。

ビギリ…!

頭の中で何かにひびが入るような音が聞こえる。

構うな鍵がパズルのようになっていたら無理矢理にでもねじ込み
こじ開ける。

ズザツ！！

い、ガーッ

ギギギィズガツ！！

！

体と頭で五月蠅いノイズが聞こえる。

どうでもいい、とにかく急ぐんだ。

「接続・開始」
トレース・オン

無理矢理繋ぎ止める意識を今度は一度も使ったことのない精神同調
に近い魔術を行使するため、必死になって心臓の鼓動を弱める。

視界がチカチカして、それでも気絶に耐えるのはひとえに目の前で
苦しそうにしている少女のおかげだと思う。

不謹慎なのは百も承知だけど、それでもその人が今までに見たこと
がないくらい美人で可愛くて、幼ない少女からこんな感情を掻き立
てられるなんて間違っていると思いつつも
男なら目を
離すことが出来ないくらいだ。

解っているのか衛宮士郎。

その行為は例えこの少女を救うためとはいえ

解ってるさ。でも、こんな可愛い子が死ぬなんて間違ってる。

ああくそ。自分でも、もう何を言っているのか解らないくらいだ。

悩む時間はもう終わりだ、これからは正義の味方を成す時間だ。

最後に一層少女を自分の胸に引き寄せ顔と顔を接近させる。

消えかけている少女の僅かな胸の膨らみが自分と密着し、鼓動と鼓動が重なり合う。

よく見れば、少女はボロボロのローブの下には何も来ていない状態だった。

その事実気がつくのと心拍数が馬鹿みたいに跳ね上がり、顔が熱くなる。

少女の体の柔らかかさに加え、殆ど直に近い胸の感触の興奮に理性がぶっ飛びそうになるが、歯を食いしばってギリギリのところまで繋ぎ止める。

そして、滴り落ちる魔力を詰め込んだ血を

彼女と唇を合わせることで強引に流し込んだ。

それは時間が止まるかのような感覚だった。

美少女と話す10秒とストープの上に手を置いた10秒は時間の感じ方が違つと聞いたことがあったけど、こんな正反対もいいところだ。

この瞬間が永遠にも似たような、そんな錯覚。

柔らかな唇の感触は俺にとっては初めての経験だ。

こんな事、一生忘れることなんてできないくらいの気持ちよさで、胸が高鳴って

これが衛富士郎の初めての正義で、初めての罪。

こんな姿、魔術の秘匿云々の前に警察に捕まるだろ。

大いに結構だ。それでこの子が助かるなら俺は喜んで引き受け背負おうじゃないか。

明日から町での俺の代名詞（異名）は

『少女性愛者』^{ロリコン}になっちまうだろう。

それが俺と彼女の出会い。

その時はまったく気がつかなかった、いつの間にか自分の手の甲に浮かぶ奇怪な痣のような刻印に。

衛宮士郎は罪を背負う。

少女は何処までも悲劇で、俺は何処までも愚かだった。

千を救おうとして五百を取りこぼすのなら

それは嘗て正義の味方を志した者の言葉。

それを俺は、

を切り捨てて、

を護り抜こう。

未だ認められずにいた。

当たり前だ、この身は剣なのだから。

嘘4話（後書き）

士郎は悟りキヤスターの体内に向かって自らの液を注ぎ込む。
と言っ訳で士郎悟りに目覚めるの回でした。

それにしてもJKキヤスター人気無いのな（笑）

NG扱いになるけど第4の選択肢を忘れていた。ヤらないけど
？ウツホ！いい漢

嘘5話「R・15」(前書き)

今回は残酷な描写、人道的倫理観をかなり無視した表現があります。苦手、嫌いな方はブラウザでバックすることをお勧めします。こちらを見なくてもストーリー上問題ないようにしていきますので、ご安心を。

最初にこの時代この世界に呼び出され、最初に目を開けたときに

目の前に居たのはおおよそ人の持つ醜悪さを全て併せ持ったかのような、下劣な男の魔術師だった。

男は私の姿を見た瞬間、何が気に障ったのかいきなり表情を険しくし、舌打ちをするとカツカツと背を向け離れて行ってしまふ。

まるで私に対する興味を信頼を、信頼を失ったかのように。

まだ一言も言葉を交わしていないのにそれは無いだろう。

呼び出された場所である、振るい廃屋のような部屋の隅には何人も裸体の女性が淫具と男の白濁にまみれて放置されていて、そのどれもが精神のほとんどが死にかけだったことは一目で知れた。

「最初の仕事だ、掃除（食事）しておけよ」

男は怒った声でそれだけ言い放ち部屋から出て行ってしまふ。

何だと言うのか。この私に、人に仇なし恐れられた身とはいえ仮にも英霊である自分に、こんな壊れた女性たちの精神を食らって

殺せと言うのか。

いくら魔女と言われた私でも、こんな仕打ちを受けるために聖杯の呼びかけに応えたわけじゃない。

しかし、目の前の女性たちは薬と魔術によって心まで犯しつくされてしまっている。

もう、心に光は灯ることすらない。

「……………ごめんなさい、どうか恨んで……………恨めるだけの心を持って逝ってちょうだい。」

体を満たす魔力を不快に思った事などこれが初めてだったけど、この味は彼女たちが生きていた証。絶対に忘れたくないと思った。

「令呪を持って告げる。若い女を20人ほど攫って来い。俺の用がすんだらお前に食わせてやる。」

最低な魔術師だ。こんな肉欲にまみれたゴミ屑なんて早々に他のサ
ーヴァントに殺されてしまえば　　いいえ、そんなことを待つ
ていることすら億劫だわ。

殺してしまおう。裏切りは私の象徴。本当に嫌いな呼び名だけど、
思い知らせてやる。

自身が呼び出したキャスターがどれ程の存在かを……………

令呪の縛りに無理矢理町の女性を攫いながら、そう心に誓いを立て
る。

しかし、そんな私の計画はひと組の襲撃者にあっさりと台無しにさ
せられる。

「ギャハハッ

」
「ご馳走さまだあ、殺しに来たぜえ！！！」

画の令呪をはぎ取り自分の手に移植する。

その流れるような裏切り行為にマスターだった男は顔を青くし

「御機嫌よう、マスター（愚か者）」

私は男の体を渾身の力を込めて刺青のサーヴァントの前に突き飛ばす。

ザマアみる。私はこれで自由だ。お前なんてもう用済みだ。

心の中で笑いがこみ上げる

と、その瞬間

「何だあ？よりもよってこの俺に擦り付けよってか？
ハッ、上等上等！」

その罪 オレが貰うぜ？

一瞬にしてぐちゃぐちゃの肉塊に成り果てる男の体

頭蓋が一面に巻き散らかされ、臓物は細切れで、手足なんて割き鳥
賊みたいになって、ビシヤリと血に濡れた音を立てながら床に重力
に従って崩れ落ちる。

今のはなんだ？

クラスは解らないが、今の攻撃を推測する限りではアサシンかバー
サーカーか。

どちらにせよこのままじゃ私は長くは限界出来ないしこのサーヴァ
ントとの戦闘も不可能だ。

どうする、どうすれば？

「あー、ツマンネ……………そうだ、お前に一つ質問んだけどよ？サ
ーヴァントを死姦するにやどうしたらいいのかね？ぶっ殺しても後
が楽しめないんじゃないや達成感なんて零ジャン？」

……………なんてことを言い出すサーヴァントだ。こいつは英霊と言っ
よりも邪霊と表現した方がいい気がする。

「おいおい、ロリっ子サーヴァントよお、シカトすんじゃないよ。
援交させるぞ？」

「……あなた、最低ね。流石の私もここまで品性が崩れた人物を見るのは初めてよ?」

「おお、やっと返してくれた言葉が詰るって、さてはSだな? けどどりやお前が望んだ応えの一つでもあるんだぜ、言っちまえば俺が免罪符だ。ヒヤハハツ!!」

私の望み?

免罪符?

何の話だ? やっぱりこいつ、どこかおかしい。いや場所は主に頭だろうけど。

「だってよお……おまえ、自分がしたことに後悔してる顔じゃねーか。」

ドクン、と胸の鼓動がひとときは高鳴る。

クズなマスターとはいえ、裏切り死に至らしめ、嫌厭でも罪なき人間を喰い荒し、
壊し

そんな最低な行為がかすんで見えるほどの残虐を目の前で堂々と見せつけるサーヴァント、私の裏切りを容認し私のマスターを殺した男。

「んじゃ、後片付けもしとくかな」

そうニヤけながら答えた目の前のサーヴァントはバチンと指を鳴らすと

部屋の隅に居た、心が壊れてしまった女性たちに無数の剣が突き刺さる。

まるで機関銃によって八チの巢にされるように

「さて、これで最悪はこの俺だ。……………ロリっ子、残りはお前だけなんだけどよ……………死ぬか？」

その言葉を言い終わると同時に部屋から廊下へと繋がる鉄の扉が勢いよく蹴り開けられ、一人の赤い少女が息を荒らげながら目の前のサーヴァントに殺気を放つ。

「アヴェンジャー！！」

ッー！？……………これはどっいつこと

「？」

部屋の隅で血濡れの女性たちだったモノを見たサーヴァントのマスターと思われる少女が殺気を向ける。無論彼にだ。

「おいおい、ずいぶんと遅い到着じゃねーかよ凜たん。遅過ぎるから敵のマスターぶっ殺してそこらにいた女も勢い余って犯っちまったよ？」

「アヴェンジャー！！！！ 私にはキャスターをしとめなさいと指示した筈よ。」

それにしても、アヴェンジャー？なんだそのクラスは？

そんなクラス、聖杯からの知識にはなかった筈だ。

一体このサーヴァントは何だと言うのか。

「あーあ、せっかくの殺人もこれじゃ興ざめだ。……ってわけなんだけだよ？キャスター、やっぱ殺すわ。」

そう言っつて全身刺青のアヴェンジャーは私に向かって右手を突き出してくる。

死にたくない

途端にこみ上げてくる恐怖。

信じられない、自分にもまだそんな夢を見る心が残っていたのか。

こんな絶対的な邪悪の前で思い知らされた。自分が悪だと思っていた罪だと思っていたことはなんてちっぽけだったのだろうか。

こんなやつ、
マスターがいれば何とか切り抜けることも倒すこともできたかもしれないのに、私は自らその可能性を放棄してしまった。

それこそ罪だ、こんな汚れた願いなんて最初から持たなければ

「ヒヒヒ、何だア？まだ足りねえのか？」

アヴェンジャーがそう呟くと私との距離を一瞬で詰め、私のローブの下の服を掴むと力任せに引き裂き始めた。

「な！？何やってんのアヴェンジャー！！！！」

「ヒヤハッ！見て判んねーのかよ？ロリっ子でも使って慰めようか
なっとなっ！！ギャハハ、俺って天才？」

一見高校生くらいの見た目なアヴェンジャーだがやはり英霊、その筋力はこの年端もいかない姿の私じゃ魔力で力を強化しても太刀打ちできない。

されど侮るなよ復讐者、この身はキャスター（魔術師）だ。

その身は攻撃に転ずるとなれば現代には失せたる神秘を持って汝が身を消し去ろう。

接近しているアヴェンジャーの下腹に右手を添えこの身に残る魔力を絞り出してランクAの魔力をもって全力で撃ち抜く。

とっさの反撃に気がついたのか身を擦るアヴェンジャーだが

遅い！！

閃光とともに彼の左わき腹がごっそりと吹き飛ぶ。

アヴェンジャーの表情が驚きと苦痛に歪み直後

この世のものとは思えない邪悪な

優しい笑みを浮かべ

「偽り騙し欺く万象」

ヴェルグ・アウエスター

死ね死ね死ね死ね死ね死ね死ね死ね死ね死ね死ね死ね死ね死ね死ね死ね
死ね死ね死ね死ね死ね死ね死ね死ね死ね死ね死ね死ね死ね死ね死ね死ね
死ね死ね死ね死ね死ね死ね死ね死ね死ね死ね死ね死ね死ね死ね死ね死ね
死ね死ね死ね死ね死ね死ね死ね死ね死ね死ね死ね死ね死ね死ね死ね死ね
死ね死ね死ね死ね死ね死ね死ね死ね死ね死ね死ね死ね死ね死ね死ね死ね
死ね死ね死ね死ね死ね死ね死ね死ね死ね死ね死ね死ね死ね死ね死ね死ね
死ね死ね死ね死ね死ね死ね死ね死ね死ね死ね死ね死ね死ね死ね死ね死ね
死ね死ね

突然頭の中で鳴り響く呪いのカーニバル。

そして私の体に彼と全く同じ傷が左わき腹がごっそりと吹き飛び

「さっさと行けよ、キャスター」

そう小さな声で言いながらアヴェンジャーは私のロープを掴み体ごと天井近くに合った硝子のない窓から放り捨てた。

ああ、彼はなんて悪なのだろうか。

その身がどんなに罪で汚れようとも、悪人で敵の私さえ逃がすためにこんな茶番を演じたと言うのか。

その姿は今まで見たどんな者よりも英雄で

無実の罪人（正義の味方）だった。

嘘5話「R・15」（後書き）

残酷で優しい、ぶっ壊れたアヴェンジャーを表現するのって難しいです。

復讐者が背負ったのはこの世全ての罪。

少女の罪まで自らが肩代わりし免罪符として奪い取る。

因みに復讐者エミヤは原作本編のどのルートとも違う衛宮士郎の末路の設定で行きます。

サーヴァントステータス（前書き）

キャスターの愛にあふれて生きるのがつらい。

サーヴァントステータス

現時点でのサーヴァントステータス

本編とは若干違います。(アヴェンジャーはデータがないので適当)

クラス：セイバー

マスター：イリヤスフィール・フォン・アインツベルン

真名：アーサー・アルトリア・ペンドラゴン(身長154センチ・

W73(A)・B53)

ステータス：

筋力A 耐久B 敏捷B 魔力A+ 幸運B(A 宝具C、A++

：対魔力A 騎乗B / 直感A - 魔力放出A カリスマB -

傷心中につきカリスマ・直感低下中。でも強い。

クラス：アーチャー

マスター：間桐桜

真名：衛宮士郎

ステータス：

筋力B 耐久B 敏捷C 魔力A 幸運C 宝具E(A++ (複製

物は1ランクDOWN)

：対魔力C 単独行動A / 千里眼B 魔術B - 心眼(真)

A -

遠坂凜がマスターのときに比べステータスが全体的に高くなっている。

クラス：キャスター

マスター：???? 衛宮士郎

真名：メディア（身長135センチ・B69（C）・W47・H65）

ステータス：

筋力E - 耐久E - B（魔力強化時のみ） 敏捷C + 魔力A -

幸運B + 宝具C

：陣地作成A + 道具作成A + / 高速神言A + 金羊の皮E

X（制限）

ステータスは衛宮士郎と契約した時点でのものです。ロリですが身長と比較して胸はある方。

（因みにイリヤ：身長133センチB61（AA）・W47）

クラス：アヴェンジャー

マスター：遠坂凜

真名：衛宮士郎、アンリ・マユ

ステータス

筋力C 耐久B 敏捷B + 魔力C 幸運E - 宝具D -、E B A

++（複製物は1ランクDOWN）

：対呪術A ++ 復讐行動A / 千里眼C - 戦闘続行A 心

眼（真）A 勇猛C

対呪術に関しては呪いの類に限り、本人が受け入れなければ一切を無効果する。

復讐行動は一度戦ったことのある相手ならば相手の攻撃ステータスに対して1ランク耐性がつきこちらの攻撃ランクにも+補正が入る。

サーヴァントステータス（後書き）

新しいサーヴァントが出たときに追加して行くかどうかと。

嘘6話（前書き）

三者三様の夜。

それは人生のピンチであったり、決意の意思を固める時間であったり、ロリコンだったり。

嘘6話

依然気を失ったままの少女を抱えて衛宮士郎は夜の街を走る。

向かう先は無論衛宮宅だ。

もしも目撃者がひとりでも現れたら、その瞬間に衛宮士郎はその社会的生命は終わりを迎えることになる。

『夜遅くにロープの下が裸同然の外国人で推定年齢10歳の少女を自宅へと拉致しようとしている青年。』

どう考えてもヤバ過ぎる。

故に全力疾走

魔術回路はこの瞬間にも焼き切れるのではないかと言っただけで体に魔力を叩き込み、100メートルを7秒で駆け抜ける。

もしも教会や協会の者がいれば血眼になって彼を殲滅するだろう。

魔術使いも大概にしると。

そんなこともお構いなしに走り続け息も絶え絶えのばて気味になってきたころ

「……………衛宮か、こんな時間に何を……………?」

目の前に屈強で無表情な、衛宮士郎が通う穂村原学園がほこるMr・クール（勝手に命名）こと葛木宗一郎がいた。

『せ、葛木先生!?!?まずい、どうすりゃいい?』

頭の中で一気に思考回路が唸りを上げる。

どうする、ここで事情を離して助けてもらうか?

だめだ、先生を魔術の世界に引き込むなんてことは出来ない。

ならあたりさわりのない嘘でごまかすか?

どうやってごまかせばいい!?!?ローブの下が裸の女の子抱えて走ってたこの状況をどうやってごまかす?

痴漢に襲われてたこの子を助けて逃げてましたともいうか?

それって俺が犯人じゃないか！！今まさに第3者視点は俺が少女誘拐犯だ。

「……事情があるなら話さんでもいい。確か衛宮は独り暮らしだったな？」

その空気を読んでるんだか、ぶつちぎって投げ捨てているのか解らない雰囲気です。葛木先生は俺と共に歩きます。

「余計な警察沙汰は私も好まん。お前の行動内容が確認出来たら私は帰る。」

おい、あんた教師だろ。と突っ込みたいが、自殺行為を進んで行く理由もなし。

変な勘繰りをしてくれなければ、家に運び終えるまでに上手い言い訳を考える時間が稼げる。

*

*

私は歩く。夜の街をひたひたと、行く当てを考えながら、身の回りの物をひとしきり詰め込んだキャリアバッグを引きながら。

「こうなってしまったのは単衣に私の責任だ、半ば無計画過ぎたことをしてかしてしまい謝罪の仕様もない。」

「あ、アーチャーさん。そんな落ち込まなくても大丈夫ですって。……その、暫くならせ……藤村先生、そう、学校の女の先生の家
に頼めば泊めていただけると思いますし。」

なんとか私はアーチャーさんを励まそうと自分を空元気で取り繕う。

今が聖杯戦争の真ただ中でなければ、”アレ”がなければ多少無理を言っても勇気を振り絞って先輩の家に押し掛けることもできたかもしれないのに。

まだまだ、とアーチャーさんは言い、私もその考えにすぐに思い至り

賛同した。

アレで死ぬはずがない。

妙な確信と嫌な予感がいり混ざりながらそう断定できるのは、私の胸の奥に潜むカリヤおじさんの届かなかった欠片が如実に物語っているからだ。

『チャンスを待つ。この戦争が局面に差し掛かれば必ず奴は”動く”だろう。その時に確実に仕留める。』

その為には聖杯戦争に参加し勝ち残っていかなくちゃいけない。

おじい様が動く状況の中に自ら飛び込んでいく。それは当に殺し合いの中へと身を投じることだ。

それは勇気の足りない、臆病な私にとって何よりつらいことだけだ。

だけで諦めない。

「君を救う、元より聖杯に願うべき望みなど持ち合わせていない身なのでな。その意味で言えば、マスターのサーヴァントに成れたことは僥倖といえるだろう。」

こんなに尽くしてくれるアーチャーさんと巡り合えた運命を信じて、私の過去を終わらせ全てをZero（始め）にしよう。

そう思いながら一先ずの宿としての頼みの藤村先生の家へと向かった。

*

*

「言い訳を聞こうかしら、何でこの女の人たちを殺したの、アヴェンジャー。」

いま、私の心は怒りのあまり冷え切っている。

目の前のサーヴァントが女性をめった切りにして殺した。

確かにキャスターのマスターが根城にしていた場所にいたからには何らかのトラップと考えての行為かもしれないが、この殺し様はあまりにも人の行為を逸脱している。

バラバラ、なんて言葉すら生温い有様だ。

20〜25人はいるであろうその死体は原形をとどめているものなど一つもない。

「んー。気分」

こいつは気分で殺戮を行えるのか。

「ふざけないで、あんたがどんな英霊だろうと私のサーヴァントである以上は私の流儀に従いなさい。殺人は絶対に認めないわよ。敵マスターも私が許可したとき以外許さないわ。」

「ヒヒ、何だよ？令呪でも使ってこの俺を縛りつけてみるかい？ア
ンリ・マユ（この世全ての罪）のこの俺に？」

確かにこいつは自称「この世全ての悪」だ。そう名乗る以上、悪行

も平然とやってのけるだろうと思っていたけど、ここまで醜悪とは思わなかった。

「次にこんな真似をしてみなさい。私は迷わずあんたを自害させるわ。」

「ヒヤハツ！いいねえその響き、ぞくぞくしちゃうぜ。なんやかんやブチ切れモード入っておきながらも魔術師な凜さんの優しさに涙が出ちまう。……まあいいじゃん、キャスターのマスターも無事にぶっ殺せたわけだし、キャスター自身も致命傷。俺と同じく横っ腹をこっそりと遣ったんだ。持って30分でくたばるだろうさ。」

そう、こいつの宝具『偽り騙し欺く万象』は触れた相手に自らの傷を写す。

写された傷はその時点で相手に自らの傷と確定させ。アヴェンジャーとの因果から切り離され独立する。

私の宝石魔術を用いてアヴェンジャーの傷を即座に癒せば相手は致命傷の怪我を負ったまま全快のこいつとの戦闘再開となる。

更に利点として、こいつの宝具は真名解放の使用魔力が極端に少ないことが最大のアドバンテージだ。

何でもランクが「D-」と、本来なら高い対魔力を持つサーヴァントなら弾き返してしまうんじゃないかと思うほどのレヴェルの低さ

と思われるこいつの宝具は、発動条件の縛りが強すぎるとかの理由で、有効対象は広いらしい。

それにしても気になることは他にもある。

「で、何であんたは本命のキャスターにとどめを刺さずに投げ捨てたのかしら？」

そう、最大の謎はそこだ。こいつはキャスターのマスターや部屋に居た女性たちは皆殺しにしたのにキャスターだけはその手に掛けなかった。

おまけに私の命令を半ば無視する形である幼い姿のサーヴァントを犯そうとしゃがった。

まさかとは思っけど……

「や、なにをわかりきった事言っただよ凜たん。んなもん答えは一つじゃねーか。」

「アイツにも聞いたんだけどよ？サーヴァントを死姦するにやどうしたらいいかって考えててな。キャスターのクラスに納まるくらいの子だ、もしかしたらうまい方法でも考え付いてくれんじや

ないかと思つてさ。な？俺ってやっぱ最高だろっ？」「

「ほう、……つまりあんたはその為にキャスターをひん剥いて逃がしたと？」

「あつたりまえじゃん。ああ、もちろんそれだけじゃねーよ？勿論欲情だつてしたさ。アイツ見た目によらず胸もあつてさ、こはあつたぜ？Aの凜たんと比べても、これを襲わない奴はいないだろってほら、よく言うだろ？悟りは殺さず犯さ」

「死ねえええええー—————！！！！！！！！！！」

こいつロリコンだ！！！！

中学生をババアと呼ぶ奴に違いない。

……キャスター。今だけあなたに同情するわ。今だけこんな奴に襲われたことに謝罪したい気分だ。

それにしてもあの幼い姿で？ なんとなく今更だけど殺意が沸くわ。

願わくば、そのまま死んでくれればこれ以上こんな変態に襲われる
こともないだろう。

それこそこの町にこいつみたいなのりコンがいなければの話だけど。

まあ、今はこの殺戮現場の隠滅が先決か。

気は進まないけど性格どぐされ外道神父に連絡を入れるとしよう。

嘘6話（後書き）

という訳で衛宮士郎人生最大のピンチでした。
アヴェンジャーがエロい。どうにかしてくれ。

だけど、キャスターにだったら私は襲いかかる自信がある（キリッ！
そうだ、ワカメをカツコ良くしよう。唐突にそう思ってます。
書きながら続き考えます。

嘘7話(前書き)

ハンッ、この僕がカツコいって？
なめた口きくなよ。
いつもの事じゃないか。

嘘7話

たった一人の少年が今宵英霊を呼び出す

たった一人になってしまった少年が召喚するは役割を放棄した器

役割の破綻した存在

されど汝は

その眼を混沌に曇らせ侍るべし。

汝、狂乱の檻に囚われし者。

我はその鎖を手繰る者

召喚の詠唱に挟まれるは狂気の言の葉。

かつてこの場所で、10年前の同じ場で間桐に連なる者が発した狂気の呪文

それは自己を蔑にし、自己を貶め、自己を殺し、自我を狂気に墮とす狂化の詠唱。

召喚者の魔力を食いつぶし、自らの能力に制約をかけるとともに、限界の箍を壊す魂の牢獄。

狂え

狂え

召喚に媒体は必要ない

そんな物はいらぬ

ただその1点において間桐の英知を呑み干した少年は確信を得ている。

今この状況において誰を呼び出すかを

ダレヲ狂気に落とそうとしているかを。

少年は上半身の服を全て脱いだ、半裸の状態で右手に古い本を持ち詠唱を続ける。

描かれた魔法陣は追い出した妹の血で描かれたモノに自身の血で一部を書き足した、通常よりもさらに複雑な召喚陣。

ある意味使いまわしにもかかわらず、その陣から今まさに現れんとする召喚の光は正常に起動していることを意味する。

「　　ブグウ……………ゲヒツ！！　　うくしょう……………ッ
！！！！」

少年の体中から血がブクブクと吹き出るように溢れてくる。

普段の少年ならその事実だけで無様な声を上げ、取り乱し卒倒してしまふ筈なのだが、今夜はそのような影は何処にもない。

少年は険しい目つきで、揺るぎない信念を持った狂気の瞳でただ前を見つめる。

「　　流体制御、覆水洗礼照準。」

その言葉と共に流れ続ける赤はぴたりと止まり　　ウゾウゾと、
まるで化生の類のように、蟲のように少年の体を這いずりまわり紋
様を作り上げていく。

「オドよりマナの道を経て大海を埋める。」

ギリギリと血でできた紋様がまるで少年の体を締め付けるように、その肉へと喰らいつき沈んで逝き、まるで刺青のように、まるで刻印のように

まるで神経ののようにギリギリと身の内に同化しようとしているかのよう

少なからず自身を持っていた貌に、弓を引くための引き締まった体に、焦げ付くように刻まれる文様はこの世全ての悪とは違う。

それは己が家の滅んだ証。

間桐の当主にのみ許された刻印の複写。

既に、そんな奇跡の領域に手が届いているにもかかわらず、少年は聖杯戦争を追い求める。

「来い！！狂戦士イ！！！！この僕に、この僕が！！間桐慎二が最強であることをお前が証明しろっ！！！！！！」

この僕を魔術師にしろ

そう高らかに願いを口にする。

この所業をもってしても間桐慎二は己が身を魔術師と認めない。

魔術師とはどのような存在であるか、彼は知らない。

それが見てきた世界の魔術師はたったの2人。

500余年を死せる生なき蟲の祖父、間桐の妖怪こと間桐臓硯と

嘗ての盟友であり、かつてその姿に恋心を抱いた遠坂6代目当主、
遠坂凜のみ。

外道の魔術師である間桐臓硯はさておき、遠坂については自分の事

を魔道に連なるものとみてすらいない為、魔術師としての姿を晒すことなど只の1度としてなかった。

否、魔道がただ研究と時代の遺産を残すという形でしかないモノとするなら、遠坂の在り方は正に術師なのだろうが、間桐慎二はそれを知らない。

故に、今の何も解らぬ自分は魔術師では無い。

知らない。間桐の英知にも、そんな魔術師とは何なのか？などという禅問答な資料など影も形もない。

あるわけがない。

だから彼は聖杯に願う。

聖杯を手に入れれば、聖杯に願いが届けば魔術師とは何なのか、魔術師とはどうあるべきかが解る。

そう信じて疑わない。

衛宮士郎がこの場にいたなら、その身は既に魔術師だろうと諭した
だろう。

魔術師が彼を見たなら、嘲笑うだろう。

間桐慎二は気がつかない。

その身は家族を失い、家族を追い出し、尚も魔術を追い求める狂気
に囚われているのだから。

「
」

彼が召喚したサーヴァントは確かに狂戦士だった。

それは聖杯戦争を侵す規則違反。

「ハイサーカー
暗殺者！！！！！」

少年が呼び出したのは暗殺教団首領。本来アサシンのクラスで呼び出されるそれは、静かな狂気に満ちていた。

嘘7話（後書き）

狂化の属性を付加された暗殺者です。
ステータスはこれから考える。

サーヴァントステータス2（前書き）

オリジナル捏造設定全開です。

ステータスとスキルは宝具内容を存分に発揮できるように考えました。

もしかしなくても、第4次の狂戦士並みの強敵。

呼び出したマスターが違っていれば、それは間違いなく主人公キアラ。

セイバー（4次）の様な願いで、切嗣や英霊エミヤの様な戦闘思考。

サーヴァントステータス2

狂化暗殺者紹介

アサシンのクラスに呼ばれる筈の暗殺教団歴代首領、ハサン・サツバーハの18代目。

暗殺教団最後の首領であり、狭気な性格であり狂気を孕んだ戦闘手法を幾度となく経験してきた。

百の貌のハサンから教主の座を継いだ人物。

彼だけは通常の暗殺者召喚では呼ぶことが出来ず、狂化の詠唱を挿むことでしか召喚されることはない。

聖杯に託す願いは、暗殺教団の再興であり、次の首領にさせることが出来なかった少女のことを想い残していた為、彼女を次のハサンにすること。

そこに誇りはなく、目標殺害の為なら暗殺はもとより、敵に堂々と姿を晒し対面して戦うことも、どんな悪辣外道な手段をとることも厭わない、戦う姿は暗殺者よりも騎士に近い。

クラス：バーサーカー暗殺者

マスター：間桐慎二

真名：ハサン・サツバーハ

ステータス：

筋力A 耐久B 敏捷A 魔力E - 幸運E 宝具C

：気配遮断D - 狂化：C / 戦闘続行A 武器破壊B 無窮の武練A++

気配遮断D - では感のいい一般人でも姿をとらえることが可能。実質発動していないのと殆ど変わらないが、相手の死角に廻り込んでいる場合に限り補足されることはあまりない。

狂化Cではギリギリ理性を残している為通常の会話はかろうじて意思疎通ができる程度。

しかし、一度戦闘となれば箍が外れ文字通りの止まることを知らない狂った戦士となる。

武器破壊Bは戦闘の中でも相手の武器の最も破壊しやすい部分的確に見抜き、ランクの低い武具なら致命的な攻撃を与え壊すことができる。

但し、一定の形をとどめない武器に対しては見抜くのは難しくなる。

宝具1：狂信宣告ザバーニヤ

対人宝具

「命」の定義を歪曲し、触れた者の「命」を他の物質へ写す。

「この剣は我が命と同義」のような形を実現してしまうことができる。

「命」は肉体と離れた殻のない中身が剥き出しのまま現れている為、僅かな衝撃でも加われれば本体の「命」は傷つき、武器同士で撃ち合うようなまねをすればショック死しかねない。

物が壊れれば確実に絶命する。

写す対象はその場の近くに在る物なら何でもよい。

宝具2：?????

対軍宝具

令呪を用いて狂化を一時的にでも解除すれば使用可能。

歴代ハサンの中で唯一の対軍宝具を持つ。

サーヴァントステータス2（後書き）

紹介の中の『彼女』は本編の外伝作品「Fate/strange

fake」のアサシンのことを言っています。

ワカメがダークホースになりそう（笑）

嘘8話(前書き)

回りキヤスターを愛して止まない。否、病む。

嘘8話

「……っん……」

目を覚ましたのは、あれからどれくらいたった後なのだろうか。

サーヴァントにも眠気はあるのかと、眠い目をこすりながら横たわっていた体を起こす。

気だるい感覚と魔力不足が同時に襲いかかり、まるで低血圧の起き覚め貧血のような気分だ。

少しずつ意識と思考が通常の回転に戻っていく。

そして、奇跡のような真実を認識する。

「……生きてる?」

この身はまだ座に還らず限界し続けている。

助かった?

廃墟のビルから放り出され、暗い路地を魔力切れの体を引きずりながら歩き、力尽きて壁にもたれかかったところまでは覚えている。

それから何があったと言うのか？

そう思ったところで、自分の中に在る一つの感覚に気がつく。

とても温かく、優しい気持ちか

魔力なんか蛇口の周りに浮かぶ結露のような、水滴にもならない量しか流れてきていないのにそう思える。

見渡すとそこは薄汚れた裏路地ではなく、畳の日本屋敷の一室であることが聖杯の知識から知ることが出来た。

寝かされていたのは私の体には少し大きめの布団。

そこから何処となく男性の匂いがするのは、この家の人間が普段使っている物だということが分かる。

着ている服も黒いローブから子ども用の紺色の浴衣に変わっている。そう言えばアヴェンジャーにローブの下に来ていた服を破かれてしまったことを思い出す。

寝かせるにしろ、そのままではなく着替えさせられたという訳だ。

気だるい感覚を我慢しながら立ち上がり、おぼつかない足取りで部屋を出る。

庭先が見える廊下に出て、自分と繋がっているラインを手繰り寄せる。

もう少し、すぐそこ……

片手で胸の鼓動を抑えつけながら恐る恐る明かりがとる部屋の障子を小さく開けると、二人の男性が見えた。

「ですから、何か特別な事情を抱えた子みたいなんですよ。」

「ふむ、深い理由話をせない訳はおおよそ認めよう。特にこれ以上の騒動もないわけだな？」

「はい、あの子が目を覚ましたら事情を聞きますんで、明日先生にもお伝えします。」

「そうか、なら私はもう帰る。くれぐれも間違いなどは犯すなよ。」

「大丈夫ですって、明日の朝になれば藤村先生も来ますし、後輩の子も朝食の手伝いで来ると思います。」

「フム、藤村先生の監察下なら問題ないだろう。邪魔をしたな。」

そう言っつて屈強な体つきをした男性は帰って行った。

そして尚、ラインから繋がる感覚がこの家を示す答えはただ一つ。

あの少年が私を助けた、^{マスター}魔術師ということだ。

僅かながら強張る手に力を込め、意を決して少年のいる居間の障子をゆっくりと開ける。

「……………あ、あの……………」

何と声をかければいいのかとつさに思いつかず、おどおどした形になってしまったけど、私の姿に気が付き振り向いた彼の顔がとても幸せそうに緩み。

「ああ、気が付いたのか。もう立って歩いて大丈夫なのかい？」

「ええ、……………あなたが私の、マスター？」

そう聞きながら途端に恥ずかしさがこみ上げてきて、はたから見たら、もじもじとした締まりのない格好になってしまった。

「は？……………マスターって何さ？」

「え？」

私と彼に同時に湧き上がる」？」

何やらいきなり話がかみ合わない雰囲気だ。

「えっと、あなた…魔術師よね？」

「ああ、半人前だけど魔術師だぞ？危ない状態みたいだったから何も考えずに君を助けたんだけど、一体何者なんだ？」

聖杯戦争を知らない？この冬気の地で？

「
どうやらお互い噛みあわないわね。……お互い質問し合う形でいいかしら？」

「よく解らないけどいいぞ？
それじゃ、自己紹介から行こうか。俺は衛宮士郎、未熟ながら魔術師をやってる。君の名前は？」

「今は、……そうねキャスター（魔術師）と名乗っておきましょうか、勿論偽名のようなものだけど今は本名を名乗ることは出来ないわ。あなた、聖杯戦争を知ってる？」

「聖杯：戦争？聞いたこと無いぞ？それと君：キャスターちゃんは何か関係があるのか？」

「ちゃんツ！？
ええ、私はその戦争で呼び出された使い魔、英霊よ。」

「使い魔って…！？何処からどう見ても人間にしか見えないぞ？」

彼は驚きながら私を眺める、どうやら本当に聖杯戦争の事を知らないらしい。

「勿論、英霊ですもの。人の形をしていない奴がいるとしたら、それは悪霊か悪魔の類よ。私のターンね。英霊の意味くらい魔術師のはしくれなら知っているでしょ？」

「ぐっ……過去に偉業を成した人や神話や、おとぎ話に出てくるような信仰や崇拜の対象となった人物のことだろ？」

「そうよ、そして聖杯の力によって現界したのがこの私。キャスターのクラスを与えられた英霊。」

ちよつと胸高々に振舞ってみる。そうよね、どうやらこの少年はこの地に居ながら聖杯戦争の事も知らない素人魔術師みたいだし、ここで上下関係をはつきりさせておかなくっちゃ。

「えっと、つまりキャスターちゃんは過去の人物で、歴史に残るような英霊ってことか？」

「そう、因みに私以外にも、この冬木の地には英霊が召喚されている筈よ。7人の魔術師が7体のサーヴァント、つまり英霊を使い魔として使役し聖杯を奪い合う戦い。それが聖杯戦争なんだから。」

「なっ!?!ちよつと待ってくれ、冬木に俺以外の魔術師がいるって言うのか!?!」

「……あなた、本当に魔術師なの?魔術師の気配がそこまで濃いものだとはい概に言えないけど、まるで今まで魔術師なんて見たことがないって顔よ?」

「……………」

「え…………?」

物凄く気まずい空気が流れる。

魔術師に遭ったことがない魔術師なんているのだろうか?

「もしかして、極度の引き籠り?」

「断じて違う!俺は毎日学校にも通っているしバイトもしてる!休日はボランティアにも出向いて地域交流の場にも積極的に参加してるんだ!そりゃあ、魔術師との交流なんてなかったけど、けしてひきこもりじゃないぞ?」

「……………」

「何だよ?今度はそつちが黙っちゃって」

呆れてものが言えない。

こいつ、エミヤシロウという人物は魔術師と呼ぶべき人物じゃない。学校に通ってバイトにボランティア？上二つは構わないにしろ、ボランティアですって？

魔術師がそんな等価交換をぶち壊す所業に何の抵抗感も抱かないなんて正気じゃない。

「はあつ、これはとんでもない外れ籤に助けられたみたいね……いいわ、マスターを矯正するのもサーヴァントの役目だと思って諦めるわよ……」

「だから、何だよ『マスター』って？俺はそんなのになつた覚えはないぞ？」

「……………ほんと、これじゃ勝ち残れないわ。いいこと？今夜は私が説明することを理解するまで寝かさないから。」

どうも私の前途は多難を通り越し万難らしい。

*

*

時は少しだけ遡り。

言峰綺礼は協会の一室で霊気盤を眺めていた。

「ふむ、今回の聖杯戦争はどうかやらクラス外の英霊が呼ばれたようだな、召喚したのは　　凜か。」

召喚された時間から推測するにそう考えるのが妥当だろう。

どうかやら最後まで自分の忠告をすっかり忘れていたようだ。

彼女の魔力が最高に高まる時間と召喚時間が少しずれている為、大方『また』やらかしたのだろう。

まあ、呼び出したのならそれはそれで構わない。

早速だが、そう急に彼女に助力を求めなければならぬ厄介事も舞い込んできたことだ。

ここはひとつセカンドオーナーとしての仕事ぶりを観るとともに、呼び出したサーヴァントについても遠くからだが見させてもらおうとしよう。

そう考えながら夜は耽っていく。

『続いてのニュースです、冬木市を中心に起こっている女性連続誘拐事件ですが』

嘘8話（後書き）

浴衣は子ども時代の土郎のものです。

キャスターに襲撃をかけた凜達の行動理由はとりあえず必要かと思
い、シン普森に出張ってもらいました。

そして、自分で押さえ目に書いておきながらキャスターのセリフが
R指定な意味で『今夜は寝かせないわよ』とデフォルトで誘惑調に
脳内変換されている私の脳内電波。

浴衣姿のキャスターに言われたらイチコロです（笑）

この気持ちまさしく愛だ ハアハア……

嘘9話(前書き)

こまけえことはいいんだよ!

今回の内容を表す魔法の域に達した一言(笑)

嘘9話

結局、衛宮士郎が聖杯戦争の事情を呑み込み自分の置かれた状況を、その底抜けの馬鹿な頭……決して勉学の能力が低いわけではないが、魔術師が絡む裏の世界の何たるやを詰め込むことが出来たのは時計の針がくるくる回って午前3時30分を過ぎたころだった。

最後の方の話は明日からの一緒に暮らすにあたっての段取りなどだったが、その頃になると流石にサーヴァントと契約したばかりで、普段から魔力の放出に慣れていなかった士郎はそのまま居間で潰れるように眠ってしまった。

キャスターは士郎の魔術回路の起動スイッチに関してあれこれと言及したが、それも明日になってからということ、これ以上余計な魔力を消費しない為に霊体化する運びとなった。

キャスターにとって幸いだったのが、士郎の魔術工房としている土蔵に魔力の回復を促進する魔法陣が張ってあったことだった。

どう考えても士郎が張ったものではないということは知れたが、彼の養父である故人、衛宮切嗣が描いたものなのだろうとキャスターは判断し、その上で静かに祈るような姿勢で膝をつき、短い眠りに就くことになった。

一見してのんびりとしたやり取りだったが、その実キャスターは心の中に焦りがあった。

このままじゃ明日にでも自分たちは脱落する。

アヴェンジャーのマスターは何故自分たちを襲ってきたのだろうか。

その答えは明確にして、不可解。矛盾をはらんでいるが故の推理材料となる貴重な情報源だ。

第一に、元マスターはどうしようもない屑ではあったけど、こと自分の根城に対する隠匿の魔術結界に関しては私が作成していたのだ。陣地作成スキルA+を舐めてもらっては困る。

余程『場』の変化に敏感な者でなければ見つけることなんてできない筈だった。

つまり、アヴェンジャーかもしくはマスターには結界などを探知できるスキルがあると考えるべきだ。

そして、元マスターが愚痴るように零していた言葉　冬木の地における霊脈を協会から委託され管理するセカンドオーナー・遠坂。

成程、あの若いマスターは今代の遠坂当主と見ていいだろう。

私たちに襲撃目標を定めたのも、誘拐などに手を染め町を脅かしていたのだから納得がいく。

だけど、今となつてはあの忌まわしい命呪の命令で命拾ひしたともいえる。

あの行いで魔力を十分に蓄えていたからこそ、マスターを失つてもなお数刻の現界が可能だったのだ。

魔力を莫大に消費する私では本来あそこまで長くは持たなかっただろう。

現在私がいる新しいマスターの屋敷を軽く解析したけど、迎撃などを行う複雑な結界は一切設置されてなく、悪意を持った侵入者への警報装置のみだった。

こんな簡素な、逆に見つけづらくらいのしょぼい結界なら、キャスターのサーヴァントがいる屋敷だとは思わないかもしれない。

勿論私自身の魔力を察しされることを防ぐ為に魔力隠匿の道具を作る必要があるけれど。

これなら、暫くは回復に努めることができる。だけど……

キャスターは一刻も早く、そして僅かでも多くの魔力を欲していた。

新しいマスターに体を求めるようなマネも考えてはみたものの、如何せん今の自分は何処からどう見ても幼すぎる。

もしこれに応じるどころか、いきり立つモノがあるようなら思わずナニを蹴り潰してしまうかもしれない。

まあ、あの見るからにお人よしな腑抜けがそんなことを良しとするわけがないか。

と、衛宮士郎に対して名誉なのだか不名誉なのだかわからない評価を付け静かに眠りに就いた。

衛宮士郎の朝は本来なら早い。

日の出前に目を覚まし、朝の軽いトレーニングの後に朝食の準備を始め、さながら通い妻のような後輩がやってくると一緒に台所に立つ。

近所の古くから姉のように慕う担任教師が朝食の時間に現れ、やれ賑やかな疑似家族模様を醸すのが日常となつて、弁当を包むと後輩が頬を染めながら一足先に部活動の朝練習のため学校へと向かい、そんな様子を笑顔で見送りながら自身も登校の身支度を始める。

そんな古風なホームドラマのような一描写が衛宮士郎宅の筈だった。

しかし、本日に至ってはどうかだろうか？

「私^{わたくし}、衛宮切嗣の娘、メイと申します。不束者ですが、宜しくお願

「い致します。」

後輩間桐桜と担任藤村大河の目の前には、異国の美少女が正座に三つ指を立てて深々とお辞儀をしている。

更に士郎が付け加える形で、衛宮切嗣の「隠し子」だと付け加える。

呆然とする二人の女性をを横に士郎は故人切嗣に心の中で懺悔する。

『許してくれ親父!!許してくれ!!!!』

最早、ホームドラマから昼ドラかゴールデンの三流ドラマと化していた。

何というエロゲだろうか。

「き、い……………り、…っ、……………んの……………かか、隠し…子
?????」

義姉、藤村大河は卒倒寸前まで思考回路が寸断されメチャクチャな状態である。起源弾など無くても人はこうも簡単にかき乱れるものなのだ。

「メイ、……………ちゃん？」

間桐桜は何か突然の事態についていけず、只々思考の渦にのまれて
いるだけのように見える。

「私は今まで母と二人で暮らしていたのですが、先日……………母が病で
帰らぬ人となってしまう　　母の最期の言葉に衛宮切嗣という
男性が私の父という言葉を聞き、彼を頼る為に日本に参りました。」

流石は裏切りの魔女、例え不名誉な呼び名だとしても役者が板につ
いている。

僅かに瞳を潤ませ幼い容姿とか弱い雰囲気、折り目正しい気品を醸
し出せば、藤村大河（単純な一般人）などイチコロだった。

「切嗣さあああああん！！」

とうとう泣きだした藤村大河は思い余って大粒の涙を噴水のように
まき散らし、キャスターを抱きしめる。

「えっと、先輩……………これは……………」

「すまない桜、俺も昨日突然キ…メイちゃんと出会ってな。ああ、DNA検査の用紙も見せてもらったし、あの子が爺さんの子どもだつて言うのは……………そうらしい。」

殆ど嘘である。

念のため其れっぽい用紙を昨晚、急ごしらえでキャスターが作り、それを見たと言っただけだ。

昨日出会った

用紙を見た

そうらしい

ほづら、嘘なんてこれっぽっちも言っただけ無い。

とんだ詭弁である。

「とにかく、一通り落ち着くまでメイちゃんを家に置きたいと思ってるんだ。本当なら遺産分配だって出来た筈なのに、親父の事何も知らなかったっていうし。血は繋がってないけど、本当なら俺たち家族なんだからさ。」

「ぐずっ………むっ、でも大丈夫なの土郎？めいちゃんこんなに可愛いのに、野獣な土郎と夜を共にして、美少女に手を出したらお姉ちゃんは許さないわよ？」

「ばっ……！出すわけないだろ！？藤姉えが許す許さないの前に犯罪だろそれ！？」

「はい、お兄ちゃんに優しくして頂きましたし、心配いりません。」

キヤスターも余裕が出てきたのか勝手にキアラを演じる始末

「先輩……先輩ってまさか……ロ」 「違っっ……！断じて違っ……！」

そっだ、そんな筈はない。

エミヤシロウは年端もいかぬ少女の体に欲情することなど、まして

や擬似的な近親愛などという背徳に心動くような人物ではないはず。

*
*

「……………そうだ、断じて違う。」

アーチャーは衛宮士郎宅から200メートル以上離れた電柱の上から、霊体の姿で件のやり取りを観察していた。

そつだ、それは違つ。衛宮士郎（俺）は少女の味方では無い。正義の味方になろうとした愚か者だ。

断じてロリコンでは無い。そつ心の中で叫ぶ。

「しかし、様子から見るにキャスターか………これと言つて奴が傀儡になつてゐるようにも見えん。まさか、アイツがキャスターを呼び出したのか？」

自分の摩耗しきつた記憶の中の聖杯戦争と今回のこれは大きく食い違つ。

それが当たり前のことなのかどうかなのはアーチャーに判断しかねるところだつたが、重要なのは「アレ」が未来において正義の味方になる衛宮士郎なのかどうなのかだ。

その一寸の判断でこの聖杯戦争の行く末が大きく変わる。

そつアーチャーは確信してゐた。

例えこの世全てを敵に回しても

そう考えていたアーチャーを遠く離れた別の電柱から見ているサーヴァントの存在に彼はまだ気が付いていなかった。

「ギャハツ!!! みつけた
ゲクキャハツ! ゲラゲラゲ
ラゲラゲラガゲラギャハヒャアハ!!!!!!」

よう兄弟、楽しんでるか?

嘘9話（後書き）

「お兄ちゃん」ただその一言を言わせてたくて無茶なやり取りをさせたこの回。

別に姿隠したままでよかったんじゃない？と思ったたそのあなた、N O！

隠し子&養子の同棲恋愛伝奇アクションADVなんて胸が熱くなるだろう？

それが口氏キヤスターならなおさらだ！

……正直、思いつきませんでした。

嘘10話 アーチャーファン注意 (前書き)

本話におけるアーチャーは原作のように格好良くありません。

格好いいアーチャーでなければ、それはアーチャーでは無いと思う方はご注意ください。

いいか、絶対に叩くなよ、絶対だ!!

心は硝子(顕微鏡のプレート)レベルの強度です。

嘘10話 アーチャーファン注意

「はあ、…ハアっ、ゼッ

トレースオン
投影開始！！」

アーチャーは逃げる。

なぜ俺が逃げている？

この身は生涯にわたり、ただ一度の敗走もなき英霊だぞ。

別に英雄などともてはやされる為に行ってきたわけではないが、それでも退くことのない、揺らぐことのない信念を持って突き進んできた英霊だ。

それが何故…逃げの為に全力を振り絞っている？

決して負ける要素があるからではない。

むしろ勝てる要素が幾重にも見受けられるくらいだ。

ならばなぜ逃げる？

ここが見晴らしの良い住宅街の密集地だからか？

今が聖杯戦争を行うには不向きな昼間だからか？

違う、そんなことでいちいち逃げるようなマネはしない。

戦えんのであれば、それなりに相手の戦力や情報を掴み取る為にギリギリの綱渡りをやって見せるのが英霊エミヤな筈だ。

無様に、醜く、だらしなく、みっともなく、型も忘れ、道も忘れ、腰も入れず、只狩られる哀れな姿で疾走とも呼べぬ愚鈍な蛇行で逃げている？

なぜ逃げる？

怖い？いいや違う、例え恐怖が目の前にあったとしてもそれすら凍りつかせ鋼の意思で立ち向かうのが英霊エミヤだろう。

なぜ逃げる？

戦略的撤退ですらない、こんな一方的な戦闘放棄なんて初めてだ。

なぜ逃げる？

五月蠅い！ならば、

「ゲヒヤハハ！！おいおい兄弟、何処に行くってんだ？ヒヤヒヤッ
！！」まるで、ドツペるつた後で自分のこと鏡で見た後みたいじゃ
ねえか。』大丈夫だってよ、その通りにしてやるから、さあ！！！
！」

なぜ逃げる？

見ればわかるだろう、

「アイツは一体何なんだ！！！！」

見てはいけない、あれは、そんなんじゃない。

そんなモノを俺は望んじやいない。

冗談じゃない。そんな訳がない。

俺は、俺は、俺は

「奇遇だねえ、俺も『エミヤシロウ』ってんだ。ヒヒヒ！」

ふざけるな、フザケルナ！！！違う、違う違う違う違う

俺は理想に裏切られ。自分で望んで、自分を踏み台にして、自分を蔑にして、自分で冒し、自分で償い、自分で

何で逃げているんだ？

解らない、判らない、分からない

何で逃げているんだ俺は！？

どうしてだ、意味が解らない、訳が分からない。

俺は正義の味方で、
ヒミヤシロウ

それで

アイツは何だ？

アイツは何の衛宮士郎だと言っただ？

世界と契約した衛宮士郎なら間違いなくそれは俺（英霊エミヤ）な
筈だ。

そうでなくてはおかしい。

矛盾する、破綻する、崩壊する、まるで今まで積み上げてきたもの
が砂上の楼閣とく崩れていく。

もうたくさんだ、

だから、

だから

「なんだよ。オレ（お前）。んなしけたこと言ってるどぶち殺すぞ？」

後ろから届くこの世全ての悪意を詰め込んだかのような悪意。

あああああああ！！！！！思い出した

忘れるわけがない。

これは地獄に落ちても忘れない、忘れるわけがない、忘れてはいけない。

『衛宮士郎』が『生まれた』その時の情景がフラッシュバックする。

黒い太陽、燃え盛る街並み、死せる地獄の光景

この世全ての悪
アム・リ・ユマ

なんで、何で、ナンデー！！！！？

何で俺がアレなんだ！！

何でアイツ（俺）がアレなんだ！！

違っただろ、違っただろ、違っただろ！！

あの出来事があったから、俺は誰かを救おうと

「「そっだ、だから俺は救ったさ」「

「900を救って100を切り捨てた」「100を殺したら900が報われた」

「この身は」「誰か（他者）の為になることなんざ飽きるほど犯
た」

「それが」「破綻してることなんざ百も承知だった」

「死せる運命にあった」「100人に裏切られた」

「味方した」「奴なんて、そもそもいたのかよ？」

「世界と」「無理矢理契約させられ、用が済むなり拷問処刑だ、いや、呪術で名前も剥ぎ取られた」

「知ら」「ねえ訳ないだろう？何せ俺も」

「違」「わねえよ、俺は」「俺が」

「エミヤシロウなんだから」

ぐらり、とバランスが崩れてとうとうその場に膝をついてしまう。

ダメだ。英霊エミヤはこのエミヤシロウに勝利することは出来ない。

否、殺すことは出来ても、そんな事をしてみる。

その時こそ英霊エミヤは世界を敵に回した大罪人として守護者より救いのない檻に囚われる。

やはり殺すしかないのか？

それが桜を^{マスター}悲しませる結末になろうとも、己が欲望を、願望を、悲願を達する為に

衛宮士郎をこの手で葬り去ることしかできないと言うのか。

「なあオレ（お前）、テメーの望みは何なんだ？俺は」

擦り切れた記憶の中で誰かがささやく

『喜べ少年、君の願いは

』

「恒久的世界平和なんだけどよ？」

邪悪な笑みでアイツ（俺）は言い放った。

嘘10話 アーチャーファン注意 (後書き)

書いておいて何ですが、私もアーチャーファンです。

だからこそこんなアーチャーを書いてみたかった。

あれ？ファンならこんな酷い姿書かないって？

カッコいいアーチャーを虐めるとゾクゾクしちゃうくらい大好きです。

嘘です、ごめんなさい。でも書きたかったのです。

嘘11話(前書き)

誰が主人公なのか解らない。ひよっとしたら、居ないのかも。

嘘11話

それは見るも無残な只一人の身の地獄

「待ってくれ、俺じゃない！」

民衆は男の叫びを聞き入れようとしない。

『お前のせいだ、お前さえいなければこんな結果にならなかった。』

「違う！違うんだ、そんなこと俺はしちやいない！！！」

そう、彼は悪行など行ったことは只の1度もない。

罪、罪、罪、罪

おおよそ人の手による罪全てを男は被せられる。

『その罪人に指は不要』

足も含めその全ての指を失う男。

最後の親指を削いだのは何処かで見た親しかった筈のダレカ。

『世を見る眼は一つで事足りる』

方目を失っても男は死ぬことを許されない。

「

ッ！！！

――！！！！！！

」

『その舌は不要』

舌を抜かれ最早弁明も弁解も許されない。

『憎い、憎い、憎い、憎い、憎い、憎い』

体を縛りつけられまた一つ、また一つと罪状が体に彫り込まれていく。

顔に胴に、背に、腕に、足に、魂に。

『お前みたいなのを言うんだよ、アンリ・マユって』

そんな訳ない。

こいつはいつだって他人を救うことだけを考えて何の恩賞も何の感謝も何の褒賞も、一切を受け取らず、人助け自体が報酬として生きてきたんだ。

なのに『この世全ての悪』なんて呼ばれていいはずがない。そう、言うなれば差し詰め『正義の味方』だろう。

あれ、……じゃあ、アイツの『本名』って何なんだろう？

場面は変わって何処かの災害地。

最早絶望的なまでの地獄の業火は、彼を貶めていた人々を容赦なく焼き殺そうとしている。

これは覆すことなどできない運命、死せる運命が確定づけられた絶対の事実。

正義の味方でもいれば、英雄でもいればそんな運命を打ち破る奇跡でも起こすことができただろうが、そんな人物は居ない。

居たとしても、彼らはそんな人物を陥れ、騙し、欺き、偽り、罪なき正義に悪を着せてしまったんだ。助かる道理など何も無い。

死せる運命の100人をが彼を引きずりだす。

『世界よ 』

「 (ヤメロ) ! ! ! 」

指を削がれ、舌を抜かれ、方目を抉られ、罪状を彫られた男が、叫びにならない叫びを上げる。

なのに、その果てに遭ったものが、剣の丘の処刑場。

「体は剣で出来ている

ただの一度も罪はなく……ただの一度も正義は無し。

この世界は 不滅の剣で満ちていた」

「 最悪の朝だわ……………」

アイツの過去なんて見るんじゃない。元から見る気なんてなかったわけだけども。

サーヴァントとマスターは契約で魔力供給ラインが繋がっている。

その関係でサーヴァントの過去を夢の中で見てしまうことがあると

言つのは聞いたことはあつたけど……納得。

綺麗がどうしてそんなことを教えてくれたのか僅かに疑問だったけど
やってくれるじゃないの。

正義の味方はバットエンドで幕を閉じました……

最悪じゃない、そんな結末があつていいはずなのに。

努力して努力して、成果を上げたものが報われないなんて在っちゃいけない。

そいつは、その功績に見合う位幸せにならなきゃいけないのに、受けた仕打ちはよりもよつてこの世全ての罪状による処刑とは……

「だから、アンリ・マユ(この世全ての悪)か……」

今のアイツからは想像もできない善人ぶりじゃないの。あんなに笑つて、はしゃいで、邪悪で

でも、確かにあんな風に裏切られ迫害されたら人間壊れてしまつたらどう。

あそこまでニンゲンに『悪であれ』とされたら、本当に邪神だって作れてしまっただろう。

そんな奴だ、だからこそ人間をあそこまで躊躇なく殺せるのも領ける。

むしろ復讐心を抱かない方がどうかしている。

だから復讐者なのだろうか？

アヴェンジャー

「アヴェンジャー、居る？」

.....

返事がない。只の
つて!!!?

「アヴェンジャー!!!?!」

居ない？まさかアイツ、勝手に家を離れて何処かに出かけたというのか。

拙い。アイツ基本スペックが低いくせにやけに交戦を好む自殺志願者宜しくな奴だから、きつとサーヴァントを探しに行ったに違いない。

時刻は丁度7時、何だか嫌な予感がする。

昨日の晩に昼間の交戦は余程人気のない場所以外は御法度だと教え込んでいたが、それが反って裏目に出たか。

あの馬鹿は小学生並みの感性しか持ってない、押すなど言われたボタンは是が非でも押ししてしまう夜となのか？

なににせよ今からでも遅くない、否、手遅れかもしれないが一先ずあいつを私の下へと呼び戻さなければならぬ。

『アヴェンジャー！！！！あんた今どこにいるわけ？』

そう、今呪と契約で繋がった魔術ラインを通して怒鳴りつけてみると。

『ヒヤハハハハハハ！！！！サイツコウダゼエエエエエ！！！！』

そつだよそつだよ！！！！それでこそ俺だ！！ぶち殺してみろよこの俺を！ヒヒヒ、投影開始イイイ（トレースオオオオン）！！！！』

最ッ高にハイな状態で戦っているらしい

『アヴェンジャー！！！！』

『あゝあ？んだよ、ひんぬー。人の楽しみ邪魔すんじゃねーよ、露出放置プレイさせっぞ？』

嘘11話(後書き)

とある日常系の裏側でした。

嘘12話(前書き)

水月の雪さんを5回ほど廻っていたら少々遅くなりました。

マヨイガから抜け出す気が失せるほど叫んでました、「雪さんは俺の嫁え!」と。

ふう…。もーぺんマヨイガ逝ってきます。

嘘12話

「ねえセイバー？あなたは聖杯に何を望むの？」

白い少女は無邪気に笑う。

「私が聖杯に託す願いは王の選定を選び直すことです。」

「ふうん。」

私との会話を楽しんでいるのだから、分からないがマスターであるイリヤスフィールはいつも他愛のない話を振ってくる。

「前は違う願いだったのに、何で？」

そして何時も私を糾弾する笑みの目で追い詰める。

「それは……」

果たしてこれ以上を口にしていいのだろうか。

「くすくす、何か隠し事かなあセイバー？」

首を傾げ私を見上げるように覗きこんでくるイリヤスフィール。

本当に私で良かったのだろうか？

経緯はどうあれ、私はアインツベルンにとって目の前にあった最上の悲願をこの手で破壊した咎人だ。

なのに、何故またしてもこの私を呼び出す気になったのだろうか？

「ねえセイバー？私ね、すっごく殺したい人がいるの。」

ドクン、とひときは高く胸を打ちつける心の鼓動。

それは私ですか？

聞くことが怖い。

アイリスフィールを護りきることが出来なかった。

彼女の母を死に至らしめてしまった。

私のせいで、

聖杯を掴むことが出来なかった。

そう言いたいのだろうか？

召喚されてすぐにイリヤスフィールから聞いた。

衛宮切嗣は5年前に死んだ。

何でも聖杯戦争の後に戦いの後遺症か、魔術師としても人としても衰弱し息を引き取ったと聞かされた。

ならば裏切り者と定めるのは残るはこの私だ。

彼女たちの目的、失われた魔法を取り戻すことだけに1千年を費やす妄執は死者（英霊）すら憎悪の対象としているのだろうか。

「それは……………?」

口の中がからからと渴く感覚に襲われ、上手く言葉を紡ぐことさえできない。

彼女の赤い瞳がとてもコワイ。

ああ、ヤメテくれ。ソナウレシソウナメデワタシヨミナイデクレ。

イリヤスフィールが自然にわたしの目の前まで近寄ってきて、その距離は既に鼻先がぶつかる寸前まで来ている。

カチカチと上手くかみ合わない歯が堪らなく鬱陶しい。

腕にも足にも、心にも力が入らない。

「あ……………わ……………しは……………」

「ふふ、怖がらなくても大丈夫よ。衛宮、殺して欲しいのはお兄ちゃんよ。」

「エ………ヤ?」

衛宮 ?

衛宮

衛宮

途端、それまでの恐怖が一転して憎悪の感情が津波のように押し寄せる。

衛宮

そうだ、彼のせいだ。

衛宮！

あの男がわたしの最後の希望をぶち壊した。

衛宮！！！！

あの男のせいで！！！！

「衛宮！！！！」

溜まらずここに居ない人物に怒鳴りつけてしまう。

「そうよセイバー。裏切り者は皆みんなみーんな殺さなくっちゃね。」

雪の少女は無邪気に私の前で踊るように両手を広げて廻る。

「その為に私はあなたを呼んだのよ、セイバー。」

「解りました、相手が衛宮を名乗るのなら私もいっさいの容赦はしません。」

そうだ、前回の戦いは私にも問題があった。

なにが高潔な騎士王だ。

誉れある戦いだ。

なにが英霊だ。

私の目的はなんだ？

私の犯した罪を思い出せ。

ランスロットとの最後の戦いとき、私に何の誉れがあったという

のか。

完璧な王を貫いた果てにあったのが臣下の憎悪なら、完璧でなくていい。

誉れに拘り悲劇を見るなら、これもいらぬ。只々その身を剣とし心は無機質に貶そうではないか。

『騎士に世界は救えない。』

救えないなら騎士である必要は何処にもない。此の身はブリテンに捧げる救国の隷属。

ならば高潔も完璧も崇高も誉も名誉も名声も品格も気高さも誇りも
栄華も正道も王道も 一切合財必要ない。

あの魔術師殺しをして目前まで至ることが出来たのだ。

騎士道を貫こうとしたが故にあんな無様を晒したんだ。

ならば、これより私が歩む道は

「例えこの世全ての悪を担おうとも　構いません。それで聖杯を手にすることができのなら、私は喜んで引き受けます。」

聖杯戦争を勝ち抜くのに嘗て聞いたこの言葉を放つことはある意味必然だったのだろう。

そこまでしなければ勝ち残れない。

そこまですてもなお足りない。

万策を用いて敵を最短で、最速で追いやって初めて勝機を見出すことが出来るこの戦い。

他の英霊とは違い前回の聖杯戦争に参加し、その記録を残してしまっているが、慎重に動いていけば何とかなる筈だ。

御三家のうちの残る二家にももしかしたら前回の私の顔を知る者が参加するかもしれない。

そうなったときには真っ先に殲滅する対象は間桐、遠坂、

そして衛宮だ。

真名がばれているのならそれでもよし、その時は存分に以前とは違う私を見せつけ翻弄させるまで。

幸いにも今度のマスターであるイリヤスフィールは切嗣など比べようもない程に膨大な魔力を持った守り手だ。

聖剣の真名解放も五回は行えると見ていいだろう。

「やる気は十分ね、セイバー。じゃあ、早速挨拶に行きましょう。まずはお兄ちゃんが怯え慄き命ごいするまで追い詰めましょう。」

「いきなりですね。衛宮を名乗る以上油断は禁物ですが、復讐のあいさつはトドメを刺すときになってしまいますよ?。」

「構わないわ。許す気も勝たせる気も負ける気だって、これっぽちもないもの。さあ、行きましょう。こんどこそ私たちの願いを叶えるために。」

嘘12話（後書き）

前書きがお粗末すぎたので。

お分かりの通りセイバーさんはSNではなくzero基準で行きま
す。

zeroのセイバーさんが立ち直れないままにイリヤ必殺『飴と鞭』
を食らったら恐らくこうなるのでは？と思い、まんまと心理誘導さ
せられた回でした。

騎士道を捨てた騎士王。

そこに華は無く、積み上げた屍の山で奇跡の杯に血濡れの手を延ば
す。

嘘13話(前書き)

プリーズ、ジャッジ。アウト？セーフ？

ギリギリの表現を目指していたらまたもや遅くなった。

+ 飲み会で急性アル中になり病院に担ぎ込まれたのさ!!!

本当にマヨイガ逝っちゃうところでした。

＼お巡りさん私です！

士郎君を悟り開眼させました(笑)

嘘13話

「それじゃあお兄ちゃん。この魔法陣の上に乗ってちょうだい。」

キャストリーちゃんの言うとおりに土蔵の中の一角に描かれた魔法陣の上に乗る。魔法回路のスイッチを作るために瞑想を始める。

「じつでいいのか？」

腰をおろし座禅を組む姿勢になりキャストリーちゃんと向き合う形になっているこの状況。

密室で形だけとはいえ『お兄ちゃん』と呼んでくれる義妹的な存在と至近距離でいる状況は後輩の桜と一緒にいるときよりも落ちつかない。

簡潔に表現するなら一人の少女を意識してしまっているということだ。

「そう、それでいいわ。次に魔法回路のスイッチをいつも通りの工程で組み上げて。それを基盤に固定するから、何時もより慎重に、お兄ちゃんがより完璧だと思っ出来栄のものにしてちょうだい。」

「うう、簡単に言ってくれるな……」

キャスターちゃんの教育はスパルタに感じるけど、こんなのは魔術師が、魔術師としての人生において一番初めに行うべき事柄だと言うんだ。

つまり、今までの俺は魔術師ですらなかったという訳だ。

だったら、今からでも遅くない、衛宮士郎は魔術師にならねばならない。

黙々と頭の中でトリガーワードの先にある、手の届きそうで届かない、誰も知らない秘密の位置に手を伸ばす。

体がギリギリと引き伸ばされるような、引き千切られそうな錯覚。

背中から液体窒素を流し込まれたかのような感覚。

「来たわね。」

ガチリ、ガチリと歯車が咬み合うように起動スイッチが組みあがっていく。

と、

キャスターちゃんがオレが座っている魔法陣の中に入ってきて顔を近づけてくる。

「落ちついて、緊張しなくても大丈夫。」

大丈夫な訳ない。

一定のリズムで脈動していた心臓の鼓動が一気に跳ね上がる。

ダメだ、落ちつけ、意識が乱れれば起動スイッチは不完全なものになってしまう。

沈まれ、沈まれ!!

「……っん……」

キャスターちゃんがローブを脱いで紫のワンピース一枚の状態になる。

か細い腕、白く艶やか肌、幼いながらも膨らみは自己主張をするふくよかな胸、折れそうな腰。

「いくわよ……」

キャスターちゃんが俺の首の後ろに手を廻し絡めてくる。

「キャスター、ちゃん」

少女の匂いが、迫ってくる。

汗臭い俺なんかとは違う、幼く、可憐で、甘く、誘惑的で、妖艶で、その全てに存在を奪われるような錯覚に陥りそう。

「んんっ……」

彼女と二度目のキスは、今度は俺のために。

キャスターちゃんの唇と俺の唇が強く重なり合う。

見れば彼女も相当恥ずかしかったのか、顔を真っ赤に染め上げていた。

考えて見れば当然じゃないか。

出会ってからまだ10数時間程度しか経っていない男と濃い色沙汰でもない状況でキスなんてしているんだ。

普通の女の子でも嫌がるだろうし増してサーヴァントとはいえこんな若い少女が何の感情もない筈がないじゃないか。

なのに、未だ背徳感が劣情の波と共に押し寄せている俺のはいきり立ったままだ。

それがどれだけの背徳か知るが故の感慨。

花も恥じらうという言葉があるならそれを摘み取り己が剣山のさしものにして一輪を散らすが如く。

衝動に駆られる。

衝撃が迫る。

最早狸々まじりか猿まじりにでも落ちてしまいたい欲求。

目も前の少女を小

「ぐ　　あがぁあつ！！！！！

！！！！！！」

体中の、隅々が針か何かでこじ開けられる様な感覚に襲われる。

ナニガ起こってる！！？

落ちつけ、呼吸を乱すな。

視界が判別できないほどに点滅を繰り返す。

白から赤へ、そして暗転、

途端に全身を内から焦がすような痺れが襲う。

「そう、呼吸を整えて！気を抜かないで、丹田に力を込めて。普段使用していた固魔術回路の固定化と同時に、あなたの普段使われていなかった回路が起動し始めたみたい。」

普段使われていなかった回路？

普段は脊髄の一本を通して襲いかかる悪寒や熱気が今は全身を駆け巡っているのはその為か。

「……一体、なん……」

何本あるんだ？俺の魔術回路は？

「待つて、
27本よ。…一代の資質にしたら破格の総数だわ。」

それがすごいことなのかどうなのかは自分ではわからない所だったが、キャスターちゃんがそう評価するなら凄いことなのだろう。

勿論一代に限っての話だろうけど。

「ぐ、……この痛みと痺れは一体いつまで続くんだ…？」

「あわてないで、自分のイメージする起動スイッチを思い浮かべて、

ゆっくり、ゆっくり。」

そう言いながら尚もキャスターちゃんは俺を正面から抱きしめ、まるで飯事で我が子をあやす母役のように優しく頭を撫でてくれる。

丁度俺の顔にキャスターちゃんの胸が当たる位置にあり、幼いながらも確かな膨らみは人の体の心地よさにおける史上にして至宝とも感じる張りとも柔らかさを一枚の布越しに主張し、僅かに感觸の違う頂点に鼻先が触れる興奮に最早ツナギのホックが壊れてしまうのではないかと心配しなければならぬレベルだ。

このままじゃ彼女を、彼女のことを襲ってしまう。

何の冗談だ衛宮士郎。

俺はいつからそんな少女に欲情し、恋愛対象としてみるようになってたと言っんだ。

か弱く、可憐な少女こそ衛宮士郎が命を賭して守り抜きたい人々の一つなんじゃないか。

俺は美少女の笑顔が見ればそれで満足なんだ。そこに喜びはあれど悦びが在っちゃ

「トレスオン 想像開始」

心頭滅却心頭滅却色即是空色即是空空即是色色即是空色即是空空即是色空即是色煩惱退散煩惱退散煩惱即菩提煩惱即菩提！

！！！！！！

頭の中をただひたすら虚無にし、洗い流すが如く清めの言葉を汜濁させる。

まずはトリガーを構築しろ　　起動トリガーは……撃鉄のように強固な鉄鐘が落ちるようにガキリ、でもゴギリ、でもなくガリチと歯車がかみ合うように

体の中を駆け巡る魔力、さながら血管の中をサーキットレースが行われているみたいでガリガリ五月蠅い。

「ふう、一先ず午前中は体を休めていてちょうだい。……うん、ちやんとパスも開いたし、やっぱり供給魔力は少ないけど、さつきよりは大分楽になったわ。これなら簡単な魔道具と工房を作成するくらいは可能だわ。」

「そつ、…か。っう！」

「安静にしてて、お兄ちゃん」

そう言っつて視界のおぼつかない俺の体をキャスターちゃんは静かに横に倒し、一緒に座りながら俺の頭をその膝に乗せてきた。

所謂膝枕という奴だ。

…勘弁してくれ、休めそうにない。

嘘13話(後書き)

セウト!!!!

雪さんを嫁にしてキャスターを娘にしよう。

嘘14話(前書き)

日常パートってむずいね。

後半は決して病んでません。

むしろ恋する乙女はこれがデフォルトだろう？

嘘14話

「よう遠坂、遅刻ギリギリなんて珍しいじゃん。」

遠坂たるもの常に優雅であれ。

「ごめんなさいお父様。聖杯戦勝序盤で早くも余裕がありません。」

そして美綴り、あなたはそんなに私が息絶え絶えで登校してきたことが嬉しいの？

その満面の笑みと今の私が無くしてしまった優雅さを寄越しなさい。

「ええ、今日は朝から知人が訪ねてきていたので…私も会話を楽しんでる内に時間を忘れてしまったの。」

何とか取り繕ったぎこちない表情で無理矢理いつものキャラを演出する。

「ぶっははっ、いいっていいって。そんな肩で息してるような状態で無理な余裕顔見せられたって、違和感しかないよ。」

ぐう、……なんだかものすごく負けた気分だ。

それもこれも全部アヴェンジャーのせいだ。

強引に令呪で強制送還させようとしたら『そいつは勘弁だ。今令呪を使われるのはまじい。』とか言っていてあっさり聞き入れてしまった。

その割に戻ってくるのはめちゃくちゃ遅いし。

なにをしていたのかと聞けば『ん？コンビニでおでん喰ってた』しかも私の財布からお金を拝借していた始末。

ふ・ざ・け・ん・な……！！

あの不審者全開の姿であんたはコンビニに入ったのか、そして私のお金を使ったのか！！

アイツの思考回路は、いけないことはとりあえずやってみようかと考える中学生のチンピラか？

「まったく、間桐兄はいつも通りのサボりかと思えば妹の方はやけに拳動不審。皆勤賞バカの衛宮は欠席、でお次は息絶え絶えの遠坂

なんて、今日はなんかイベントでもあるの？」

「え？」

枯れたとはいえ、聖杯戦争システムの最重要、根幹となる術式気盤を作り上げた間桐君は巻き込まれないようにするために籠城するのは何となく予想していた。

もしも外来のマスターが聖杯戦争に大胆かつ最も容赦のない形で介入してくるとすれば、一番手っ取り早いのが間桐への襲撃だと推測できる。

現在の間桐にいる正統な魔術師は老獺の間桐臓硯只一人。

いくら年齢不詳の何十年という歳月を積み重ねた魔術師だろうと街中でサーヴァントに襲われたらひとたまりもないだろう。

籠城策に出るのはある程度予想していた。

だけど、聞き捨てなら無い一言が確かに聞こえた。

桜が学校に来ている？

どういうことだ？

養子とはいえ間桐を名乗る以上、あの馬鹿（慎二）が強引に当主を名乗っているとしても桜には危険が付きまとう時期だ。

それをまるで合戦前の平野に放り出すようなマネをするなんて魔術師の家系でもない筈。

学校にくる。

それだけで登下校間に危険は付きまとう。

増して日が落ちるのが早い冬のこの季節、学校が終わるところには辺りも夕闇に包まれると言うのに。

衛宮士郎、たしかそいつの家にしゅっちゅう上がり込んで献身的に押し掛け妻宜しくしているという話は聞いたことがある。

ならば今聞いた挙動不審という言葉も納得しただろう。

だけど、それは遅れてでもその衛宮君が学校に来ていればの話だ。

当の本人が学校に来ていないのに、何故間桐桜は学校にくる必要があるのか？

解らない、…が、推測できないわけじゃない。

昼休みになり屋上へ出向き霊体化しているアヴェンジャーに声をかける。

「ああ？なんだよ凜たん？あ、もしかしてその弁当くれんの？ひゅー、とうとう凜たんの弁当をこの足で踏みつけることができるのか、マジついでるね。」

やらんわボケえ！！

しかも食べるんじゃないかって踏みつけるのか。つくづく救えない外道サーヴァントだ。

「ちょっと調べたいことがあるの。」

「へえ、そいつはまた物騒な話題だな。んで、お駄賃は？」

「今朝のおでん代でチャラにしてあげる。」

「ちえっ、踏み倒してやろうかね？」

「殺すわよ」

「へいへい、凶暴なマスターは頼りになるなあ。」

まったく、こいつはいちいち漫才のようなやり取りをしなければ会

話が出来ないのか？

「間桐の家の周辺を調べてちょうだい。勿論敷地にまで入る必要はないわ。500メートル圏内に使い魔やその類が居ないかどうかを調べてくるだけでいいから。」

「あん？何だよ気になるお年頃の凜たんはまさかこの俺を使つてすトーキングか？」

「ボケかますのも状況を読みなさよ。間桐つて言うのはアインツベルンと同じ御三家の一角だった所よ。」

「『だった』ってこたあ、今は違うのか？」

「間桐は土地の霊質が合わなかったのか、次世代に魔術師の因子を引き継ぐことが出来なかったのよ。」

「ふうん。で？んな没落魔術師の家に何のゴヨウが？」

「あの家にはまだ妖怪魔術師ジジイが一人居るのよ。だから聖杯戦争の契約システムとか貴重な魔術資料が残ってるわけ。」

「成程、つまり下手に狙われるとこつちが不利になるから監視しておけつてことか。ありゃ？でもそんなら俺がぶつ殺しの皆殺しにして家ごと潰しちまえばそんなめんど癖え真似する必要ないじゃん？」

「それはこっちの事情よ、もう聖杯戦争に出ることがない間桐なんて魔術の知識があるだけで一般人と変わりないじゃない。そんな相手をあえて殺す必要なんてないわ。……心のぜい肉だけどね。」

「ひひひ、何だよ凜たん『勘違いしないでよね』みたいなセリフは吐かないのかよ?」

「うっさいわね!いいからあんたは私が家に戻ったら監視を始めなさい。」

「…凜たんのニューヨクシーンを?」

「死ねえっ!」

そして人の話を聞け、このエロサーヴァントめ。

*
*

私の方が断然大きいもの。

バスト85センチのEカップは伊達じゃないんだから。

兄さんが言ってたもの、男は巨乳に憧れるって。

きっと先輩に限って小さい胸が好みだなんてことはないわ。

でも、今日はあの子のために学校を休んで二人っきりで一日を過ごすらしい。

そんなの絶対にいや。

私だってもっと先輩と一緒にいて、一緒に料理を作って一緒に宿題をやって一緒にテレビを見て一緒にお風呂とかお布団とか

あの子はまだ小さいし、先輩とそんなことまで平気で出来るのだろうか？

うん、先輩は優しいし迫られればきっと流されちゃう。

髪が独りじゃ洗えないとか言って、一緒にお風呂に入ること、寂しくて一人じゃ眠れないとか言って先輩のお布団の中に入ることも

悔しい。

それが率直な感想だ。

聖杯戦争さえ終われば、私の最後の一手さえ終われば後は何の憂いもなく先輩に告白しに行けるのに。

そうすれば先輩と一緒に暮らすこともできるのに。

いいや、考えが先走り過ぎてる。

まずは先輩の気持ちを大事にしなきゃいけない。

いきなりの急展開に先輩が心にもなく私を拒絶することだって考えられる。

そうよね。

いくら先輩が優しいからって、それに付け込むようなマネはしたくないもの。

まずは私がどう魅力的に自信を表現するかって言うことが重要だものね。

藤村先生が『就職担当の先生が自分をどのようにアピールして魅力的な商品として売り込むかが重要だと言う話を一日中していて疲れ』って話していたっけ。

そう、今まさに間桐でなくなった桜（私）にはこの状況が当てはまる。

自分をどう魅せるか。

先輩にどう見てもらうか。

一後輩じゃなくて、女の子として女性として異性として見てもらって、そこから私と付き合いたい、自分だけの女にしたいって思ってもらわなくちゃいけない。

その為には……………

今日の晩御飯はメイちゃんが来たお祝にうんと御馳走を作ろう。

内助の功

勿論、先輩の家計に負担をかけないように工夫に工夫を重ねるのも忘れちゃいけない。

将を射んとするならまず馬から

メイちゃんに私という存在がどれ程先輩に必要なのか、それを認識させなくちゃいけない。

まさに一石二鳥

家庭的な女の子らしさで、それでいて密かに先輩の味を越えている料理を振舞うことで心をわしづかみにしちゃおう。

「よゆうよゆう、巨ぬーのじょーちゃん。間桐ってヤツの家は何処だしらね？しらばっくれると乳挟むぜ？」

いきなり後ろから聞き慣れた声で、絶対に聴かないセリフを聞いた。

嘘14話(後書き)

アヴェさんの本日のお買い物。

おでん均一70円セール。

大根、卵、はんぺん、つみれ、ガンモ、ちくわ。 || 420円

ロングTシャツ || 340円

ファンデーションx2 || 1800円

ヘアスプレー || 950円

計 || 3510円

PV20万記念的な座談会（前書き）

これからもご声援、感想をお待ちしています。

PV20万記念的な座談会

ア「なあ、本作の俺ってホロウのアイツと大分違うね？」

猫「そうだね、基本下種キャラだし。」

ア「いやいや、書いてるお前ほどじゃねーよ。ロリコンHENNT
AI巨ぬー好き。」

猫「甘い、雪さんLOVEが抜けてる。」

ア「ヒヒッ、しらねえよ。舐めた口きいてると隅々まで舐めるぞ。」

猫「やめい！そしてザリチエ出すなし！アレか？隅々まで舐めるつ
てのはやっぱ臍物とかもですかい！？」

ア「ヒヤハハ！お前の臍物何色だ？」

猫「茶色だから！あと綺麗なピンクとか鮮やかな赤だから！」

ア「なーんだ、てつきりエロそうな紫かと思ったのに。つかお前酒
に煙草とハンパねえじゃん。急性アル中にもなってるし、長生きし
ないぜ？」

猫「シャラップ！そして俺はどこぞのナメック星人か。」

ア「ほら、さつさと答えるよ（脅し）」

猫「俺は雪さんを嫁にするまで死なん。：ホロウのアヴェさんは土郎君の闇黒面だろう？本作のアヴェさんはアンリマユと同一に扱われたエミヤシロウ。つまり年期の差というか闇黒レベルの差というか、つまり悪性の格が段違いで上ってわけですよ。」

ア「ふうん。ところでさ、俺の身長ってなんで低いんだよ？生前はアーチャーと全く同じなんだけどよ？シヨタ好きの年増にや興味ねえんだけど。」

猫「お前、絶対大勢の人敵に回してるよ。」

ア「そりゃあ段違いの悪性なんだろ？それでいて正義の味方とくりや敵は多いに越したことはないじゃん。」

猫「俺にそんな勇氣はねえ。」

ア「情けないねえ。ちつたあ俺を見習えよ。」

猫「俺はまだ社会的に抹殺されたくない。アヴェさんの身長は土郎君と同じ。理由は生前の最も優秀な肉体時期がその体のときだったからです。」

ア「まあ、俺の手足アレになっちまうしな。」

猫「そゆこと。」

ア「そう言えば俺って呪いの類は一切無効化できるんだよな？」

猫「そうだよ？」

ア「呪いがねえ（ニヤリ）」

猫「ニヤリ」

猫「そうだ、アヴェさんのヴェルグアヴェスタの使い方もちゃんと考えてあるよ。」

ア「おお、そうなのか？なにに、こう、辺り一面惨殺死体とかギヤルのパンティとかビチャーってなるのか？」

猫「違うっ！！そんなチートだか羨ましいシーンだかわからないシユールなギャグセンスあふれる能力じゃねえ！！！」

ア「なんだよちがうのかよ……」

猫「そんな残念そうな雰囲気醸しても駄目だ。正義の味方らしいモンにしてやるよ。」

ア「うわー。ださいださい。」

猫「そんな余裕ぶっこいてるとすぐに修羅セイバーさんにデストロイーなフラグをプレゼントされるぞ?」

ア「そいつは怖え。凌辱し甲斐があるな。」

猫「お前マゾな能力のわりにはドSだよ……慢心王に真っ先に抹殺されるぞ。」

ア「んで?未だお預けのライダーは誰になるんだよ?巨漢のムサイやつはいやだぜ?」

猫「安心しろ。期待はしてもらっちゃ困るけどな。とにかく破綻した組み合わせのコンセプトを貫くぜ。」

ア「オリキャラ厨のお前のことだし適当に作るのか?」

猫「そこはまだ秘密、でも不幸な女はそろそろ欲しいな。なんか皆幸せオーラで聖杯戦争そっちのけにしそうだし。」

ア「だから俺が動かにゃならんのか、テメエ。」

猫「感謝してるよ、クラススキル復讐行動(笑)」

ア「OKだ、ギヒヤヒヤッ!!!そろそろ逝くか?」

猫「ちよ、まえ、そ

アッ—————!!!

完（嘘）

これからもご声援、感想をお待ちしています。

嘘15話(前書き)

名探偵美綴、そしてカリオストロを見て触発された。

「今ここに俺が来なかつたか!？」

「馬鹿野郎!そいつがルパンだ!!」

嘘15話

振り返るとそこに人はおらず、間桐桜は不思議そうに首をかしげた。

あれ？確かに先輩の声で話しかけられた筈。

言葉の内容こそ下品下劣極まりなく、絶対にあの心優しき先輩こと衛宮士郎が吐かない台詞だ。

しかし目の前にはいつもと変わらぬ殺風景な校舎と影を落とす夕暮れのみ。

人影もまばらな下校風景に、声の主と思しき人物は影も形もない。

聞き違いだろうか？ うん、きっとそうだ。

昨日と今朝の一件で少し疲れているのかもしれない。

それに丁度先輩のことを考えていたところだ、不安と願望がごっちゃんになってあんなあらぬ声を風鳥の過ぎ様に聞き違えただけだろう。

そんなことよりも買い出しに行こう。

早めに準備しに行かないと、先輩が先に夕飯を作り始めてしまうかもしれない。

そうなっではせつかくの思い立った計画が台無しだ。

少々小走りになりながら間桐桜は学校を後にしていった。

* * *

「つぶねー。本人に遭っちまうところだったぜ……」

失敗失敗。

チヨイ後姿からでもわかる巨乳女子高生に淫行ついでに道を聞こうとしたら、まさかサクラだとは思わなかったぜ。

おいおい、生前の俺には巨ぬー!!桜って方程式は無かったのかよ？
なあ、アーチャー？

せっかく限界したまま怪しまれずに活動できるようにメイクで顔の刺青消して髪も目立ち過ぎないヘアカラースプレーで色変えて、おまけにTシャツまで買ったんだぜ？

ズボンはそこいらの学生から剥いただけだな。

見た目いかにも衛宮士郎！だけど極悪につき悪行を行います、みたいな？

しっかしどうするかね？間桐の家なんて覚えちゃいないし。かといつて凜さんに『道わかんねえ』というのもダリイ。

大体、凜たんまだこの町のこと全然教えてくれてないもんな。

変なところが抜けてるのは覚えてたけどこいつはちよいとっつかりが過ぎるぜ？

しゃーないけど、こんな草むらに居ても道は訊けねえし、一旦ここは霊体化して桜をすーキングしながら視姦でもするかな。

「ん？衛宮？あんた今日休みじゃなかったっけ？」

何か草むらにいたら活発そうな女子に見つかったよ。

完全にタイミングのがしたな、こりゃ幸運低いぜ俺、きつとEは確実に逝ってるな。

- SIDE REVERSE 『美綴』 -

「ん？衛宮？あんた今日休みじゃなかったっけ？」

何でアイツは出歯亀みたいな素振りや草むらに潜り込んでるんだ？

何となく見つけた衛宮に声をかける。

すると

「あゝ、いやなんて言えばいいのかな？……ほら、ああ、そう。制服！制服なくしちゃってます。」

見れば衛宮の服装は制服の上着を着ていない、ロングTシャツ一枚の姿だ。

「制服って、あんた学校でなくしたの？」

「そ、おっかしいな。どっかで作業したときに置き忘れちゃったみたいだし。」

確かに、こいつはいつもどっかで修理やら雑用やら一人で引き受けているからな。

弓道部を止めてからさらに拍車がかかったみたいで、ここどころ毎日色んなところに出没してはブラウニーやってたから、成程そんなに方々飛びまわってちゃ制服を何処に置いたか分からなくなってしまうのもうなずける。

「にしては何だかノリノリじゃん。いつも以上にテンション高そうに見えるぞ?」

「なに、普段は自分に関係ないことやってて久しぶりの自分用事だ。そう考えればちょっと可笑しくなっちまってな?」

衛宮にしてはえらくまっとうな思考だ。

失礼ながらもそう思わずにはいられない。

「で?そんな草むら探してたの?一日中学校サボって探し回っても見つからないとは大変ね。」

「...一日中?」

「何で疑問形になるのさ?今日授業出てないでしょ?」

「あ、あーはいはい。そういやさぼっちゃってたな。そっかそっか、もうそんな時間か。」

「衛宮。集中して取り組むのも程々にしておきなよ?」

こいつは何か集中すると周りが見えなくなるというか馬鹿みみたいな一心不乱に陥ることがあるからな。

弓道するときだって射る瞬間はまるで無我の境地にいたってるくらいだし。

「気をつけるぞ。んじゃな。」

そう言って手をひらひらさせながら衛宮は校舎の方へ向かって歩いて行ってしまった。

何かいつもとイメージが違うな。

口元はやたらニヤニヤしてたし、そう。慎二を相手にしてる気分だ。

衛宮はよくつるんでたから感化されたのだろうか？

「程々にしておきなよ？」

そう背中に声をかけ私もがこうすることにした。

近頃、若い女性の誘拐事件も近場で起きてるから他の学生も部活は中止だし、大人しく帰るとしよう。

そう思いつつ、商店街を横切るつとして下ッペるに遭遇……………

「銭形とルパンの駆け引きってこんな感じだったっけ？」

「何の話だ？美綴？」

買い物袋を引つ提げて間桐妹と見知らぬ少女に挟まれながら歩く衛宮にばったりと出会う。

「や、あんたさっき学校にいたじゃん。もう制服見つかったの？」

「？何の話だ？？俺は今日一日学校に行ってないぞ？まあ、あんまり自慢できるような話でもないとは思っけど……」

「は？」

衛宮の雰囲気は、うん。

いつもの間抜けそうなお人よし顔だ。

「今ものすごく馬鹿にされてる気がしたんだけど気のせいかな？」

変なところは勘がいいのもいつも通りだ。

「ルパンってホントにいるんだ……」

「だから何の話だって。」

「学校で制服の上着無くしたあんたと会ったんだって。ちょっと…
…何時もより不真面目さ3割増しくらいの。」

「まっってください美綴先輩。不真面目さ三割増しの先輩って、それ
じゃあ先輩じゃありません。」

…確かに、間桐にそう言われてみれば、そんなのは衛宮じゃない気が
する。

白昼夢だったのかな？

「お兄ちゃん、学校にそっくりさんでもいるの？」

お兄ちゃん？

「いや、俺に似てる男子なんてそんなにいないと思うぞ？」

「そう、個性的な顔の生徒がそろってるのね。」

「……別に俺の顔が無個性ってわけでもないと思うぞ？」

… 外国美少女にお兄ちゃんと呼ばれる衛宮……

「…衛宮ってそんな性癖があったのか？」

「違う！誤解だ。この子はちゃんとした俺の家族だぞ。」

へえ、それはまたどこぞの隠し子から始まるギャルゲの主人公だろうか？

「全然信じてない顔だな。」

「まあ、いつも通りのあんたを見て安心したってところだよ。確かに、あんたはそのくらいのドン臭さでこそ衛宮だ。」

「……なんでぞ。」

「ともかく、突然変なこと聞いちゃって悪かったよ。明日は登校するのかい？」

「それが、まだどうにも決めてなくてな。メイちゃん、この子のことなんだけど、まだ日本に来たばかりだし、家に女の子一人を置いておくのも最近何かと物騒だし。」

成程、確かにお人よしの衛宮なら美少女を放ってはおけないか。

「物騒なのは分かるけど、両手に花な状態で商店街歩くのも気おてるといいよ。学校の男子が見たら明日から二つ名が変わるかもしれないし。」

「うっ……俺の今の二つ名って何だ？」

「ブラウニー。」

「…なんだかお兄ちゃんにぴったりの言葉ね。」

「先輩の人物像そのままのような例えですね。」

間桐妹まで認めているんだ、これは明日から面白くなりそうだ。

「じゃあ俺たちはもう行くけど、美綴も気をつけて帰れよ。」

「ああ、分かってるよ。」

また明日。と言いかけて今の会話を思い出しグダグダな感じで別れを告げた。

それにしても、私が学校で見かけた衛宮は一体何だったんだろうか？

「おータイヤキじゃん！おっさん一つくれね？120円？タケーよ、あと20円！おっさんと俺のの素敵な笑顔に免じてここは一つどう

よ？ サンキューウ！ヒヤハハ！！」

何処かでまた衛宮の声が聞こえた気がしたけど、あの二人に何か奢っているのだろうか。

美少女のメイちゃんは育ち盛りとして、あいつは間桐の胸を何処まで成長させる気なんだろうか？

そんなくだらない想像をしながら自宅へ向かった。

嘘15話(後書き)

アヴェさんのキャラ変わってね?と思う方に。

「彼はとっさの演技に必死でした」

ズボンの被害者は…一成でおk?

嘘16話(前書き)

マイコプラズマ肺炎に感染した それでも出社命令 社員大量感染

(今ここ)

上司ザマア W W W

嘘16話

教会の前にとあるひと組の聖杯戦争の参加者がいた。

一人は長身の青

その出で立ちには正に猛獣を思わせる、狼のようにぎらついた目を持ち、マスターと肩を並べている。

「それでは、私は監督役の神父に聖杯戦争の参加を伝えてきます。あなたはここで待機しててください。」

「律儀だねえ。別にこんなしけた教会に、いちいち参加表明しに来なくてもいいんじゃないかねえか？」

「半分は私用でもあります。ここの教会の神父、つまり監督役とは知り合いでもあるので、上手くすれば何かいい情報を聞き出すこともできるかもしれませんし。」

「まあ、そう言うことなら仕方ねえな。何かあったらすぐに呼べよ。」

「大丈夫です。そんな取って食われるようなこともありませんよ。」

受け答えているのは男装姿の女性。

バゼット・フラガ・マクレミッツ

魔術協会に所属する封印指定の執行者であり、第五次聖杯戦争においてランサーを召喚したマスター。

その胸には、嘗て対死徒戦において一時期共同戦線を張っていた言峰綺礼に僅かながら好意的な対応を期待していた。

言峰綺礼が何かを必死になって追い求める愚直な姿は今でも思い出せる。

本心こそ聞き出したことはないが、彼と語り明かした夜は鮮明な記憶として焼きついている。

自分はあれからさらに腕を磨き、協会から聖杯戦争への参加を命じられる程の大役を担う信頼を得るまでになった。

言峰綺礼はそんな聖杯戦争の監督役を務める程の立場にまでなった。

ならばこのめぐり合わせは、言わば運命だ。

そう思わずにはいられないほどバゼットは内心ときめかせ彼のいる教会の扉を開く。

「ようこそ、バゼット・フラガ・マクレミッツ。このような夜更けであろうとも、ここは迷える子羊を導く場所であり　　聖杯戦争を監督する場でもある。君のような律儀なマスターがここを訪れてくれたことに感謝しよう。」

「お久しぶりです。言峰綺礼。背が伸びましたね。」

「これも信ずる神の悪戯か、私自身も驚いたところだ。」

「第一戦から遠のいたから、筋肉の強制が緩んだのかもしれないね。」

「これはまた、皮肉な物言いだな。確かに全盛期の實力には遠く及ばないだろう。」

どこか嬉しそうに、そして懐かしむように言峰綺礼は口元を釣り上げながら笑う。

まるで、当時のことがおかしくてならないと言わんばかりだ。

しかし、そんなことはバゼットは知らない。

「ここに来たのは登録と、サーヴァントの償還状況の確認にあります。」

「それは御苦労なことだ。 ふん。教会の霊基盤には既に7つのクラスが召喚済みとなっている。どうやら君が冬木に集いしマスターの中で最も遅くこの地にやってきたようだな。」

「……私が最後、ということとは……アインツベルンや他のマスターも既に……」

「そうなるだろうな。今回の聖杯戦争は前回から10年と異例の速さでサイクルが行われている。しかし、集いし者はつつがなく召喚の儀を取り行っているということだ。」

その言葉にバゼットは今回の聖杯戦争の構図を予想する。

50年物短縮期間で始まった聖杯戦争。

つまり、本来の期間を見越して聖遺物の探索をしているであろう御三家は十分に目当てとする聖遺物を入手しているかどうか。

決して楽観視はできないが、発掘能力においてその莫大な資金と権力を惜しみなく使うアインツベルンは、この状況下においても十分強力な英霊の聖遺物を手に入れている可能性がある。

セカンドオーナーの遠坂については協会からの情報で聖遺物探索の動きは確認できたが、話しによれば現在聖遺物探索の依頼状は取り下げられていない……つまり、今回の聖杯戦争に御三家として参加する可能性はあっても強力な英霊の召喚は出来ていない可能性が高い。

間桐については前回の聖杯戦争で魔術素養のある次代が全て亡くなっってしまったと聞き及んでいる。

今回の参加は絶望的と見ていいだろう。

そうになると、外来の魔術師は私を含め5人ということになるか。

恐らく、今回の戦闘は速効性と機動力が鍵となる。

何よりも、最初に尻尾を出した方が負けになると思う輩が多数を占めると思うだろうが、ならばこそその短期撃破を主軸に置いた大胆な機動力が重要だ。

これに乗って強力な必殺を持った各個撃破を続ければ、相手は明確な対処方法を構築する前にこちらの牙にかかる。

その為には……

「言峰神父。実は折り入ってお願いがあります。」

「ほう、君から頼み事とは珍しい。何事もたった一人でこなしていく姿が印象的だったのだが……確かに、この聖杯戦争では、そのような心情も変えざるを得ないか。」

「あなたを戦友と思つての頼みです。」

「成程、嘗て同じ視線を駆け抜けた仲だ。正に戦友と呼ぶにふさわ

しいだろう。私は教会の代行者として、君は協会の執行者として。立場が違えど、対立する二極の勢力も凶悪な存在の前には共に戦線を切り抜ける必要があったからな。」

「ええ、あの時の戦線を共に切り抜けた貴方だから頼みたいのです。言峰綺礼」

「私に協力して頂けませんか？」

言峰はしばし考え込むような姿勢をとりバゼットから背を向ける。

バゼットは気がつかない。

その口元と表情が、どうしようもなく邪悪に歪んでいることを。

「残念ながら、その頼みは承諾しかねる。いくら戦友とはいえ今度の聖杯戦争においては協会と教会、双方から監督役の任命を受けている。魔術協会からのみの任命であれば吝かでもなかったが、聖堂教会からは私の所属する第八秘跡会直々の通達だ。それに、私は御三家の遠坂において後見人も務めているのでな。向こうにも一切の助け伊達はしないと云ってある傍で別のマスターに肩入れをするのも義に反する。」

「……そう、ですか……残念ですがそこまで強い信念の下監督役を

務めているのなら、これ以上は貴方の信条を害するものになってしまいませんね。」

「こちらこそ、戦友に協力できないのは心苦しい限りだ。」

「迷惑にならなければ幸いです。…では、私はこれで失礼します。開始の宣言はこの後すぐにも行うのですか？」

「そうだな。この後教会の前にある街灯が赤く光る。それが聖杯戦争開始の合図となる。くれぐれも帰りには気を付けることだな。」

「そちらも、外来の魔術師には貴方の姿は良く映らないかもしれないかもしれません。油断しないようにしてください。」

「たしかに、『第一線から遠のいた身』だからな。まして、サーヴァントに狙われてはひとたまりもない。その時は監督役ながら不本意ではあるが、『参加者を頼る』かもしれないな。」

「クスツ、そうですか。では……」

バゼットは苦笑交じりで教会の扉を閉めて行った。

そう、バゼット・フラガ・マクレミッツは何事もなく教会から出て行った。

出ていくことが出来た。

「意外だな。てつきり貴様は、あの女の令呪を腕から根こそぎ奪つものだと踏んでいたのだが？」

「物騒な物言いだな。私は神に仕える身であると同時にこの聖杯戦争における監督役だ。規律を重んじる聖職者としてそのような悪徳をする筈がなかるう。」

「ハッ、ほざけ。どうやらこの10年で我を甘く見始めているな。その不敬、早々に改めねば六道おも超える末路を味遭わせるぞ。」

「ほう、どうやら相当に貴様は『アレ』が気に障ると見た。その表情、なかなかに見物だぞ。」

「当然だ。あのような雑種は我が最もこの世で消すべきとしている物の最たる例だ。未だ息を引き取らせぬのも貴様の兇戯に付き合っているが故だ。」

「そちらも掃け口として重宝しているように見えるが？
まあ、それは置いておこう。」

「ふん、
しかし、今度の聖杯戦争も歪なものだな、あの
女に言った言葉には確かに嘘は無しか。」

「嘘など無い。既に7つ『以上』のクラスが現界している。」

「本来聖杯には7つを越える英霊の召喚は機能として備わっていない筈であるっ？」

「確かに、凜が召喚した英霊がクラス外とするなら、霊基盤に7つのクラスを示す物の中で確実に欠番が生まれる筈だ。しかし、通常のクラスはすべて埋まっている。ならば考えられるのは」

「同時に複数クラスを召喚したか、多重クラスの召喚か、いずれにせよまっとうな輩では無いな。だが、雑種ごときがいくら集まろうが我に相対するまでもない。雑種は雑種同士で戯れさせておくし
よう。」

「それまで、今しばらく大人しくしているのだな、ギルガメッシュ。」

「なあ、お前らは魔術師とサーヴァントでいいんだよな？」

バゼットは教会を後にし拠点としている洋館へ向かう道の途中で一人の少年に声をかけられる。

そこから発せられたのは紛れもなく聖杯戦争に関わるフレーズ。

つまり

「ランサー。貴方はどうやら運がいいみたいですな。」

「だろう？早々に相手から誘われるなんざついでるとしか言いようがねえからな。」

ランサーはそう言いながら魔槍を構える形でバゼットの前へ出る。

場所は住宅街の中でありながらも自然なスペースである公園。

丁度良く辺りに霧が出ている今は、秘匿を前提とした戦いの場にはもってこいだろう。

「行くぞバーサーカー。こいつを殺しつくせ。」

嘘16話(後書き)

バゼットさんマジ主人公サイド。

そしてワカメちゃんマジイリヤ役(笑)

神父さんがバゼットさんをキラヨシカゲしなかったのは『必要がなかった』からです。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6555w/>

Fate/Aveng

2011年12月7日07時45分発行